

創世記

はじめに	2 page
中国の例	2
人間力の発現まで	2
天帝と王	3
万物と人	4
メソポタミアの神話	5
都市の成立	5
原初の水	7
アブラハム	10
アブラハムの系図	10
カナン	13
一神教の神	13
ユダヤとイスラエル	15
旧約聖書のモーゼ五書、ヘブライ人の周辺	16
洪水伝説	16
メンフィス神話	22
Ptah プタ	22
ヘリオポリス神話	27
Atum アトゥム	27
創世記	31
ヘブライ語のイメージ	31
世界は神によって創造されたものか？	31
神 אלהים に形はあるのか？	32
天地の変動は如何にして出来たのか？	33
おわりに	36

はじめに

ヘブライの神話を考えるものですが、20 世紀、21 世紀に生きる我々は、合理的、科学的にみるということになります。神話はそういう考え方のない時に始まっています。また、神話の起源とそれが文字に記されることにも隔たりがあります。

王の正統性を示すものとして記されることが多く、正統に連なる神は人の姿、人を越えた力をもつ象徴を供えた姿となります。滅ぼされた側は、怪物として描かれがちとなります。

人の姿をしない神のことを視野に入れて、かなり回り道をすることになります。

中国の例

人間力の発現まで

神話の時代に神というと、人の形を想定しております。素っ裸という恥ずかしい姿はみせられませんので、衣のみならず装身具もつけ、化粧を施すこともあるでしょう。人がまだ素っ裸で動物と同じように山野の木の上や洞穴に暮らして居た頃、神という概念すらなかったことでしょう。

人は息ができなくなること、大量の血が流れ出すことを恐れます。生きているものは適当に暖かく潤っております。暑すぎても冷たすぎてもカラカラに乾いても、生きた心地はしません。水を求め、食べ物を求め、寒暑、風雨、雷火、地震・火山・洪水・津波を恐れます。自然には人を越えた力が宿っており、それに順応しなければ、怪我や病、死に囚われます。人には及ばない力をもつ動物には殺されないように警戒したことでしょう。我々はそのような原始的な暮らしをすっかり忘れさっております。ですから、彼等が日々感じていたことはもうわかりません。

人は直立歩行を覚え、道具を使い、火を使うことを覚えて他の動物とは異なる生き方をするようになりました。食物を焼き、土器を作り煮炊きし、調理し、蓄える方法も開発しました。獣皮や羽や繊維を用いて衣を作り、身にまとい、屋根を造り、雨露をしのぎ、水はけを工夫し、室を工夫しました。集団で原野に出て柵を設け外敵から備え集落を形成しました。死者を埋葬し、先祖を祭るようになりますと、集団生活を営む約束事を定めるようになります。

集団生活をいたしますと、役割を分担して狩猟や採集ができるようになり、野生動物を家畜として育て分かち合うことが出来るようになりました。採集ばかりでなく焼き畑や耕作により作物を栽培し分かち合うこと、貯蓄することが出来るようになりました。狩猟や放牧、耕作の成果を挙げるには、自然のありかたを習熟することが必須となります。

小粒の種が芽を出し、水をやらねば枯れます。花が咲き、実がなり、枯れ、種が残る。卵から子が産まれれば、腹から子が産まれる。どの時期にどうすれば上手く育てあげ、収穫できるか？頭数を増やすことができるか？自然のサイクルを的確に捕らえ、時期を逸してはなりません。四季の運行をとらえ準備をするには時を知ることが重要になり、太陽の出入りの位置、星の動きを注視し、その時を導きだすようになりました。

集団間の分業が進み交易が常態化しますと、集団間の時を共有しなければ約束事が成立しなくなります。また、交易には相互に納得する物々の交換でなくてはならず、いわゆる等価交換になる相場感覚が重要になります。基準となる産物（穀物、鉱物等）なるものも必要になります。のちには度量衡が定められ、計測出来ねばならなくなります。また、集団はそれぞれの役割により組織化され、役割には貴賤が生じま

す。

ここまで来ますと、人間の集団力が自然や動物の脅威に対応できるようになります。いわゆる人間力の発現です。祭祀に優れた者、戦いに優れた者、栽培や飼育に優れた者、病や怪我の治癒に優れた者、道具を造るに優れた者、土木や大工に優れた者が現われ、集団の役割を強化することで人間力が増幅されてゆきます。

集団間にも優劣強弱が顕著となり、ある集団が他集団に従えるようになります。有力となった種族が己の集団の祖を最も優れたものとして祭祀し、従えた種族にも従わせようとします。これは容易ではなく、紆余曲折があったことでしょう。

天帝と王



帝 (甲骨文字)



祭 (金文)



祭 (甲骨文字)



神 (金文)



神 (甲骨文字)

殷では地上の帝を上帝 (天帝) の子としました。帝という文字は漢代の字 (漢字) です。殷にはありません。殷代では甲骨に刻された文字で帝とあります。これは表意文字で、縛った三脚に平板を置いた卓の形です。祭 (まつる) は金文では祭とあり月 (肉) と示 (卓) と又 (手) から成りますが、甲骨文字では祭とあり示 (卓) がありませんので月 (犠牲の肉) とそれを捧げる手の形の文字となり、祭の原義は犠牲を捧げることでした。収穫をもたらしてくれたものに謝し更なる収穫を祈願し、最初の収穫、家畜の初児を捧げたようで、それが置かれた卓を以てその主 (上帝) を象徴したのでしょう。

神 (神) は金文では神とあり示と申からなり、神は雷光ですから雷光を祭っている形の文字となります。甲骨文字では神申のみですから、雷光が神であったのですが、後には雷光を用いる存在とみなされることになります。

天には天帝のみではなく、天を統治する完全なシステムがあるとみなされたようです。星座に天の組織が表われているとされ、何故完璧かといえば、各星座が北辰 (歳差で移動する) を中心にして一斉に回転していることをその証としたようです。天帝は北辰のあたりに存在し、天のみならず地も統治する力を有しているとみなされました。天の完璧な秩序を地上に実現することが地上の帝に求められました。子である地上の帝が独断で統治することはできません。その行為が天帝の意に適っているか甲骨にその旨を記し卜して確認をしなければなりません。そういう存在を祭る卓をもって天帝を象徴したのですが、いつしか天帝、あるいは地上の帝そのものを表す文字とみなされるようになりました。

国を形成する人間の集団力の象徴である王朝の王の力が強大となりますと、王を神に次いで力のある存在とみなすようになります。強大な帝は人ですから、その親である天帝の姿も同じとみなすようになります。王が強大な力を象徴するようになる以前には神はさまざまな姿をしていたようです。太陽や月、雷光や風等々、木や石など物そのもの、動物や半獣半人やさまざまな姿が想定されておりました。その面白い図が山海経 ([アープラノート](#) [山海経の怪物ども](#)) にあります。これは古代中国の例ですが、大河の流域に興隆した四大文明の王朝にあっても、同じようなことがみられます。

王朝が続きますと、その緊張感が無くなり、帝が私意で民の安寧を損なうような時を迎えます。帝にも悪帝があると幻滅を覚え、天帝の天を独立させ、擬人化されないいささか抽象的な存在の天とし、あるいは母なる大地に対する父なる天のごとき変貌をとげてゆきます。殷王の乱れを正さんとした周の文王が

諸侯の前で、「惟天地萬物父母、惟人萬物之靈（これ天地は万物の父母にして、これ人は万物の靈なり、書経、泰誓上）」と述べました。天を父、地を母とみなし、天地（父母）で万物を生み出し、靈とは天地の靈（氣）の宿ることであり、万物に靈を宿らせました。万物に宿る靈のなかで人に宿る靈を最も優れたものと見なしてのことでしょう。この後に、殷王は「佛敬上天、降災下民 上天を敬せず、災を下民に降す」とあり、その靈を有する人のなかで最上位にある殷王がその靈を害していることを憂えるものとなっています。

そういった抽象的な思考ができる賢人が王朝に役割を得ますと、王朝の正統性を確立することになります。王朝の根源に立ち帰り、そのはじまり、更に、万物の起源に至り考えることになります。

万物と人

この世界は万物に満ち溢れておりますが、一粒万倍という言葉がありますように、一粒の種が年月をかければ広大な麦畑を形成いたします。大木も時をもどせば一粒の種に戻ります。大鳥も大亀も小さな卵に戻ります。人も生れたときは赤子でした。赤子は父と母が交わり母の胎内に生じたであろう微小なものでした。

リグベータに、「上に衝動力あり、下に展開力あり」とあります、何かの力が作用し、何かが動き出し、これにより天と地が分かれ、天は陽光や雨を下ろし、地では土中の種が芽をだし、茎から葉をだし、枝を伸ばし、幹を太らせて、花を咲かせ、実を結び、実を鳥獣に与え、種を遠くまで運ばせ子孫を増やし、大木へと成長し、枯れてゆきます。上が空で下が海に囲まれた島嶼に住む者は、太陽と塩水の相互作用から生き物が生じてきたと思ったことでしょう。そして、天と地、あるいは天と海も分かれる前があり、他の例に同じくそれは元来一体であったと想定しました。

中国の賢人は天地が分かれる前の状態を太極☯（「天地未だ分かれざる前、元氣混じて一と為るをいう」と名付けました（太極の前に無極を設定します）。気の旧字は氣で、古代の語源を採録する後漢の説文解字では「客に饋（おく）る芻米（すうまい）なり」とありますが、すでに原義とはかけはなれており、太極の説明にはなりません。その初文は三であり金文では𠄎、甲骨文字では三で雲気、雲が起こる形とあります。元々混然一体の雲気であり、生氣、精氣があり気体にも液体にも固体にも姿を変えるエネルギーのようなものなのでしょう。

太極は、ものを動かす氣（エネルギー；陽氣；—）とそれを受けて成長させる氣（エネルギー；陰氣；--）が未分化の状態です。これが—と--とに分かれ結合することで、ものが生れ成長します。三段の組み合わせで8通りの性質の違いを導き、六段の組み合わせにすることで64通りの違いを導き、殷代に行われた膨大なト占内容とその結果起こった経験を評価し、事と物のありようを六十四通り（[易経ネット](#)）、三百八十四の解釈にまとめあげるようになります。

	𠄎 三 气	 北東・東 震・雷	 東・南 離・火	 東南・西 兌・沢	 南・西北 乾・天	 南西・東南 巽・風	 西・北 坎・水	 西北・東北 艮・山	 北・西南 坤・地
（方位は先天図、伏羲八卦図、太陽南天で乾、後天図、文王八卦図、坎を子、離を午とする）。									

始原の状態に働きかけた存在、その存在が万物のなかで人に最上の靈（氣）を与えます。その存在を崇め、それを最初に得た人が人の祖先であり、その祖を祭祀していることが、王朝の正統性となります。それは、当時の最新の知見を盛り込んだ宇宙論でもありました。実際に起こったことには、善きこともあれば悪きこともあり、栄光も滅亡の悲惨も、その紆余曲折を生き抜いてきた祖先の経験を後世に伝えるべく編纂されたのが神話だったと思えます。

参考文献

[アープラノート](https://scrapbox.io/arpla/山海經の怪物ども) ; <https://scrapbox.io/arpla/山海經の怪物ども>

[易経ネット](https://ekikyo.net/64ka/) <https://ekikyo.net/64ka/>

メソポタミアの神話

都市の成立

創世記では、英訳ですと、「In the beginning God created the heaven and the earth.」とあり「はじめに神は天と地とを創造された」となり、全知全能の神が何もないところから「天と地」を造りだしたイメージをもつかもかもしれません。英訳とヘブライ語では異なります。その違いを見る前に、シュメールの神話をみておきましょう。

ヘブライ人がその物語を編纂する前にはシュメールの神話がありました。創世記はそれに独自の解釈を加えたと思えます。

西アジアでは新石器時代の終わる紀元前 6000 年頃には麦の栽培と山羊、羊などの家畜化が起こっており、メソポタミアでは紀元前 5500 年とか 4300 年頃に治水灌漑農業が成立し麦の栽培が始まり、南メソポタミアの定住農耕文化が進展し、神殿を中心とする都市が形成され、ウバイド文化と称されます。

考古学者のゴードン・チャイルドが「西アジアで農耕と牧畜が始まり、新石器革命が起きた」、「新石器革命によって、灌漑、犁、役畜、帆掛舟、車輪付き交通機関、果樹栽培、造酒、冶金術、煉瓦、アーチ、釉薬、印章、太陽暦などが発達し、都市革命が起きた。そして、都市革命によって、文字、記数法、度量衡、数学、幾何学、天文学、芸術など、人類の知識における革命が起こり、知識革命によって経済革命が実現した（[進化、歴史 Evolution, History](#)、ホンダ シンイチロウ [文字と貨幣の起源](#)）」と記しています。

前 3500 年頃には本格的な都市（[人口数万人のウルク等](#)）が南メソポタミアに拡大し、北方に及びます。都市では、祭祀者、王族、兵士が全体を管理しますが、農夫、牛飼、船の漕手、漁師、商人、書記、医者、建築者、石工、大工、鍛冶屋、宝石商、陶工など、さまざまな技能の人々が集り、生業を持ち、市が立ち社会生活が営まれます。

交易が活発化され、前 3200 年～3100 年頃のものとなる粘土板には物の印（トークン）、個数を刻んだ記録が残されています（[音節文字の系譜 {2}](#) 一楔形文字における音節文字の形成 箕原 辰夫）。その文字はウルク古拙文字とされます。その記録の 85%が物と数量の記録で 15%が文字リストであり、物の交換は、粘土の塊に記録され（約束手形の役割を果たし）麦で決済されました。また、統一の単位や単価が定められ、生産や分配のコストを含め原価計算がなされ、徴税の割当とその分配が釣り合うように工夫されていました。（粘土板資料には「会計責任者、算盤を教える役人、計算石片を教える役人、粘土石片を教える役人」、「乗算、高度な逆数、勘定（の釣り合い）、量の計算を、あなたは完全に学んだか」、「計算、勘定（の釣り合い）、帝国の管理について」と記されており、アッカド帝国では原価計算、複式簿記のごとき会計処理、その教育が行われ、帝国の経済運営に用いられていたとあります。「[原価計算の起源](#) 夷谷 廣政 専修大学会計学研究所）。アッカド期（前 2350 年）では、決済が一定の重さの「銀」でなされています。徴税と分配の適正化、交易における契約と決済が社会生活における慣習・規範として定着していたようです。

都市を築くとなると、祖先の異なる集団も集住することになりますので、諍いを避けるにも共通の規範が求められ、心を一つにするものが必要となります。シュメールの都市では、それはそれぞれの都市に降りる神でした。神の降りる処が、古拙文字での山の形（小高い処）、 また楔形文字での𒂗

Kur でした。「メソポタミアでは、“山”は大地の神秘的な力、つまり、あらゆる自然の生命力が一中している場所なのである・・・「山」は、「神聖なもの」という概念を図式化したものであって、決して現実の写実的な山を示しているのではない。物量的にこの概念を示したものが、ジックラトである。ジックラトは、シュメール神話においては、神々が「天の舟」を停泊させる所であり、神々と人間とが接触し、互いの意志を交換する場であった。フランクフォートは、神殿やジックラトの建設が、シュメール人達の政治的団結を強め、市民の誇りや市民権の意味を高めたと述べ、シュメール人の社会は「原則として」共同体の全員が平等であったと述べている。一方、ヤコブセンも、村落が都市へ発展したシュメール社会の「新しい政治形体」は、原始民主制 **Primitive Democracy** であって、成人の全自由市民からなる「総会」が政治をおこなったが、この新しい政治形体を可能ならしめるのは、堂々とした神殿や巨大な人工の山であるジックラト建設の陰に認められる高度の組織と統率力によるものである、と述べている（[神殿建築から見たシュメール王権の成立、岡田明子 HP](#)）そこにその都市の主である神の家を設定し、神と交信のできる者が神に代わって都市を運営したようです。当初は構成員の誰もが出入りし祭祀できた神の家も、何層もの構造の上に置かれ「天の舟」で神が停泊する神殿（ウニル、ジックラト）となると、神官が管理するようになったようです。

その結果都市の数ほどの神のある多神（2000 の神名あり）の世界となり、900 年間は分立状態にあったとされます。前 2900 年頃～前 2400 年頃には都市国家の争いによる併合により、王権が強化され、ウルクが領域国家を形成し、王の系譜と事蹟が記録に残ることになります。金文が隸書、漢字に変化したごとく、古拙文字は刻印し易い楔形文字化されました。

シュメールの都市の構成員にとっては、共同で灌漑設備を造り、耕作、維持、管理することが重要でした。その都市の全域は神の土地であり、土地は直轄地（神殿のために神殿所属民で耕作される地）、割当地（職務遂行により割り当てられる地）、託营地（地代が支払われる地）の分類があり、神殿所属民には、自由人、半自由人、奴隷、管理役人、商人、職人、漁夫、水夫、兵士等が挙げられ、男奴隷では果樹園労働や運搬、女奴隷では料理場、醸造所、倉庫、豚小屋での下働き、運搬人、紡ぎ羊毛処理が挙げられています。奴隷以外には割当地を得ている人が多く、区画単位が定められ、役職というか身分というか、割当数には格差がありました。また、一般人の売買の記録もあるとされ、土地売買に関する一定の商習慣もあったようです。（[シュメール都市国家ラガシュに於ける神殿の社会組織について、山本茂、HP](#)）。日本の縄文時代末期にあたる時代にこのような灌漑システムをベースとする社会システムがあるなど、日本人には想像できないものがあります。

古拙文字が、書きやすい楔形文字化され、社会規範が文字化され、都市成立の過去の伝承も記録されるようになります。アッカド語で記された「𒂗𒍪𒌷𒍪𒀭 Enuma Elish ; when on high」の粘土板が発見され、解読されました。イシン（Isin）第二王朝マルドゥク（Marduk）王（1153-1136 BC）の頃に記されたとみられるようです（[Enuma Elish](#) を参照ください）。

シュメール王名表（[歴史の世界を綴る、シュメール王名表](#)）では大洪水前では 8 人の王で 24 万 1200 年があり、都市シュルツパクのウバラ・ツツ王（1 万 8600 年統治）の末に大洪水が起こり、大洪水後には都市 Kish キシュから王が始まっています。

1 万 7980 年後に都市 Uruk ウルクに太陽神ウトゥの子が降り王となり（ウルク第一王朝）、2170 年後にギルガメッシュ王となり、2580 年後に Ur ウル第一王朝となり、以降アワン王朝、キシュ第 2 王朝、ハマジ王朝、ウルク第 2 王朝、ウル第 2 王朝、アダブ王朝、マリ王朝、キシュ第 3 王朝、アクシャク王朝、キシュ第 4 王朝、ウルク第 3 王朝と続き、サルゴンにより Akkad アッカド王朝（前 2334～2154 年 or 前

2270～2083 年) が開かれ帝国が形成され、ウルク第 4 王朝、グティ王朝、ウルク第 5 王朝、ウル第 3 王朝、Isin イシン王朝の時代となる。その後にハンムラビの率いる Babylon バビロンがこれらを制圧 (前 2004 年) します。その過程で、シュメールの神話が受け継がれますが、神々の姿、性格、役割は時々の事情により変貌します。

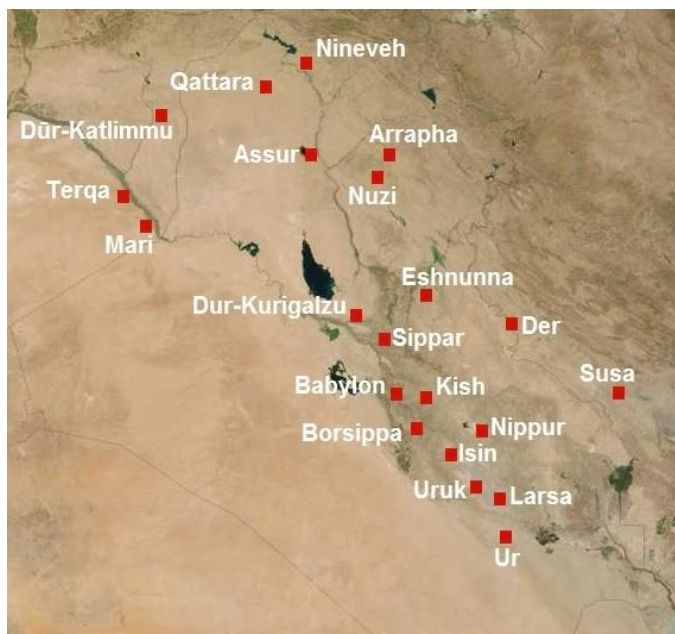
神に関する伝承は古いのですが、神話として記述されるのは王朝が形成されてからのことと思われます。その頃には神が人の形をしているのですが、違った異能の姿を保つものもあり、その始原を保つものも記されることになります。

シュメール人は、土壌と水と日照のもたらす豊かな実りを享受しました。木材の少ない地であり、土と水と草で練り成型し乾燥させレンガとしました。建築材として家屋や神殿を造るにも水は欠かせないものでした。

治水灌漑を共同して行ったことが都市を組織する原動力となり、分業が進展し、職能の発揮が求められ、人間力が開花をしていったわけです。足りないものを交易によって調達するにも長けていました。

ただ、灌漑農業は長い目でみれば、善いことばかりではありませんでした。紀元前 2800 年～2700 年頃に気候の乾燥化が起こったことが引き金となりました。この頃には、都市も規模が拡大され、麦の消費量が増え、灌漑農業の規模も拡大しておりました。水不足が起こりますと、塩類の集積が進みます。紀元前 2100 年頃には大麦の収穫が最盛時の 40% 程度に落ち込んだとあります。

モンスーンに住む人は水といえば雨を想定します。天から降ってくるものですからその水源として「天の川」や「天池」などを想定しますが、雨の少ないシュメールでは、チグリス川やユーフラテス川の水源は少ない天からの雨ではなく、地下に深く広がった水源からの湧水と想定したようです。



(進化, 歴史 Evolution, History より引用)

原初の水

Engur	An/Dingir	Ki	Enlil	Abzu	Tiamat

シュメールの神話でも、天と地と万物は元来一体化していたと考えています。始原を Engur と称し、楔形文字で としました。 は と からなり、 は (Nigin; encircle 囲む、Lagab ; block 塊 (かたまり)、break into clods 塊に砕く) とあります。 (Hal) は (divide 分ける, deal out 分配する, distribute 割り振る) とあります。 は混然とした塊、一体のもの (いずれ分かたれるもの) とみることができるでしょう。 は depths 深淵、海底, cosmic underground waters 宇宙的 (無限で秩序のある) 地下の水領域 (川・

海・湖)とも英訳されています。これには面喰らいます。

「原初の水」ともされ、あらゆる物に秩序をもたらす水の塊(大洋)です。「水」の中から天地があらわれるという感覚があります。これは近代人の想定する「水」とは異なります。いわゆる水は、別途、古拙文字では𒀭、楔形文字では𒀭 A ; Water とあります。𒀭は水というよりは、すべてのものが溶け込んでいる液状のものとするべきかもしれません。

𒀭の中にある一体のものは𒄩 (Hal) により𒀭 An と𒀭 Ki に分かたれます。液状の中に生じた泡の中に未分化の𒀭と𒀭があると考えられます。(ただ𒀭 𒀭と記されますと、Nammu/ Namma 神を表し、𒀭はDingirで神を表す記号となります)。

𒀭は𒀭と𒀭の母とされますが、これは神が人の形とみられるようになる時代の表現であり、母(女性)にこだわる必要はないでしょう。

𒀭は単独では divine representation of the sky 空の神聖者, the king of the gods 神々の王, Lord of the constellations 星座の主と英訳されております。これは後の王朝の王や聖職者、あるいは天を象徴するものとして用いられたことによるのでしょう。𒀭は古拙文字では𒀭で光をさし、当初は太陽の陽光であったと思われます。それが、「八光の星」となるのは、無数の光を放つ夜空に関心が移ったことによるでしょう。天文観測が進みますと、太陽や月も動かされているもので、有力ですが世界の中心とはなりえません。動かず、諸星や諸星座を統御しているようなポラリス(天の北極に一番近い輝星: 歳差運動で変化する)が主役となります。天の中心ですべてを司るとされ、天を代表するものとなり、𒀭、𒀭は天の象徴とみなされたのでしょう。

𒀭は古拙文字では、斜線のある円形 𒀭 の文字で地とされます。𒀭は Ka ; mix 混合、good 善とされます。ただ、𒀭 は古拙文字では矢の形ですが、楔型文字では aš ; one numeric 数字の1ですが、dili ; (to be) single, unique, sole 単独、独自であること、とあります。斜線は長短四つの𒀭に変化したのですが、𒀭 が4つ並ぶ文字は文字表では見つかりません。

𒀭の由来ははっきりしないともあります。古拙文字では複数の線が囲われている形ですから、線は様々なもの、土、水、動・植物、日月星、大気等々、森羅万象を表し、それが混然一体となっており、そして善きものと想定することが出来るでしょう。𒀭は ground 地, earth 地球, the netherworld 冥界と英訳されており、後に大地母神や冥界の女神に見立てられます。

𒀭が天を象徴するにつれ、𒀭は地の象徴となったのでしょう(土地や都市の後に𒀭が付される場合は、その土地や都市を表す記号となります)。

𒀭の子に𒀭 𒀭 Enlil エンリルがおり、wind 風, air 大気, earth 地, and storms 嵐の𒀭神と訳されています。子という表現からすれば、Enlil も元来は𒀭の中に含まれていたこととなります。𒀭 En が lord 主、𒀭 Lil が wind 風, air 大気あるいは contentious 争いを好む、を表すとあります。Enlil が An と Ki を分けて人が住めるようにした、つまり、𒀭 Engur の中の𒀭 An と𒀭 Ki の合体したものを𒀭 𒀭 Enlil が𒀭と𒀭を分離したため、人が住む、万物が住む処ができたという考え方です。

「原初の水」がどのような状態にあり、どのように分かたれたかは記されていません。Enlil は後には天候を左右する力を有する神とされますから、嵐を起して分けたのでしょうか? 不明です。

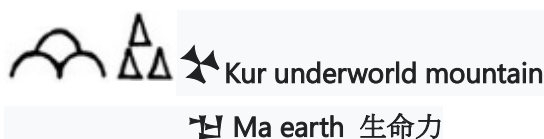
𒀭は後の世(エヌマ・エリシュ神話)では𒀭 𒀭 (Nammu 神; 創造神)とみなされ、𒀭と𒀭は目立たず、𒀭 𒀭 Abzu と𒀭 𒀭 Tiamat に焦点が移ります。シュメール神話では、𒀭 𒀭は、𒀭 ab ; cosmic sea 無限

の大洋と𒍪 zu ; deep 深い、からなり、神話の地下の淡水の大洋 Mythological underground fresh water ocean とされます。地下に深層の淡水がイメージされています。the world / earth was a disc and under was the abzu (世界/地は円盤でその下にアブズがある) と説明されています。

また、𒍪には“to know”とも付されており、home of the god Enki 𒌦𒍪𒅗 エンキ神のホームともされます。この深き処に種々の未分化のものの種があるようで知能あるものも現われることになるようです。𒌦𒍪𒅗は𒌦 Dingir、𒍪 En ; lord と𒅗 Ki からなり、この Enki からすべて、知恵あるものも生じますので、知恵を付与する神ともされています。

モンスーンに住む人は水といえば雨を想定し、天から来るものですからその水源として「天の川」や「天池＝海(説文解字)」などを想定しますが、シュメール人は、雨が少なく雨をチグリス川やユーフラテス川の水源とはみなせず、湧水とし、地下深くに水の大洋𒍪𒍪を想定したとされています。

アッカドでは𒌦𒍪𒅗 Tiamat (アッカド語) が𒅗 Ki (母性) に代わるものとみなされたようです。𒌦は Dingir、𒍪は Ti ; life、𒅗は Sal 女性を表す記号、𒍪は Kur ; mountain(s), land、𒍪と同じく primordial sea (原初の大洋) とみなされました。しかし、𒅗が付されており、女神とされ、𒍪𒍪 (Apsu アッカド語) の配偶者とされます。



アッカドは元来文字を持たずシュメールの cuneiform (楔形文字) を用いたのですが、日本人が漢字を用いて記す漢文のようなもので、用法や意味で変化が生じます。また、シュメールの神をそのまま受け入れることは出来かねますから、独自の解釈が施されることは避けられません(筆者にはシュメール文字、バビロン文字、アッカド文字の区別ができません)。

メソポタミアでも海に近い所では河川と海が交わり、𒍪𒍪を淡水とし、海の水を𒌦𒍪𒅗とし、両者が混ざり合う中(カオス)がヒントになっているようです。

エヌマ・エリシュでは、𒌦𒍪𒅗はすべてを産み出す混然一体の海洋、いわば卵子のごときであり、𒍪𒍪はそこに流れ込み刺激を与える淡水、いわが精子のごときであり、お互いの水を混ぜ合わせることで分裂が始まり、神と万物が生じ、天・地・地下を大洋の中に構築してゆくストーリーとなっています。

シュメールの神話では、𒍪𒍪、混然一体の液状のものがはじまりです。𒌦それを分割する力が作用し、主となるもの、すべてを産み出すものが発生し、液状の中に、神々、天・地・地下、万物、人を形勢してゆきました。

シュメール人が持ち込んだ概念を、北海学園大学の桑原俊一教授は、三段階でみておられます(創世神話の系譜：古代メソポタミアの資料から(1) [HP](#))。

第一は、前 2350 年頃のギルス(ラガシュ)出土文書の宇宙秩序が確立する以前の世界を叙述した小断片から、天地が一つ、「静止的原初状態」とあります。

第二を「鶴嘴(つるはし)賛歌」から「天地の分離」、そして「女神イナンナとフルップの木」の話から天(主宰神；アン)・地(主宰神；エンリル)・地下(主宰神；エレシュキガル)の三世界への分割となります。

第三に「樹木と葦」の話から天と地の「宇宙的聖婚」、「エンキとニンフルサグ」の話から「神々の誕生」となるとあります。

メソポタミアでは多神の世界の神話です。ヘブライの創世記では、唯一神であり基本スタンスは異なり

ますが、こうした伝承が姿を変えて取り込まれています。長くなりましたが、これが一つ目の準備です。

参考文献

進化, 歴史 [Evolution, History](https://jcmswordp.wordpress.com/2020/05/24/文字と貨幣の起源)、ホンダ シンイチロウ <https://jcmswordp.wordpress.com/2020/05/24/文字と貨幣の起源>

音節文字の系譜 {2} 一楔形文字における音節文字の形成ー 箕原 辰夫 <https://cuc.repo.nii.ac.jp/records/6138>

原価計算の起源 夷谷 亙政 専修大学会計学研究所 (<https://hdlsearch.ndl.go.jp/books/R000000004-I10377673>)

[Enuma Elish](#)

Enuma Elish Word History Encyclopedia([HP](#))

<https://www.worldhistory.org/article/225/enuma-elish---the-babylonian-epic-of-creation---fu/>

バビロニア創造神話 Enuma Eliš-1, [HP](#) -2, [HP](#) 大阪外国語大学

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/80558/joufs_34_059.pdf

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/80590/jjoufs_37_001.pdf

「エヌマ・エリシュ」の宇宙論 [HP](#) 静岡大学人文学部 <https://cir.nii.ac.jp/crid/1390572174756277376>

The Electric Text Corpus of Sumerian Literature ([HP](#)) <https://etcs1.orinst.ox.ac.uk/>

神殿建築から見たシュメール王権の成立、 https://www.jstage.jst.go.jp/article/jorient1962/12/1-2/12_1-2_65/_pdf/-char/ja)

岡田明子 [HP](#)

シュメール語事始 ([HP](#)) http://www.fafner.biz/act9_new/fan/report/ai/ryuh/Sumerian.htm

メソポタミア神話ファンタジイ事典 ([HP](#)) https://hetappi.info/fantasy/mesopotamian_mythology.html

前3千年紀シュメール、多神教の世界 早稲田大学文学部教授 前田 徹 ([HP](#))

<https://www.cismor.jp/uploads-images/sites/2/2014/02/ed67509d23e90dc2f18719cfa27f8b99.pdf>

Sumerian Cuneiform English Dictionary ACADEMIA ([HP](#))

シュメール都市国家ラガシュに於ける神殿の社会組織について、山本茂、 [HP](#)

https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/249380/1/shirin_041_6_581.pdf

歴史の世界を綴る、<https://rekishinosekai.hatenablog.com/entry/mesopotamia-syokioutyou2#シュメールの王名表から>

創世神話の系譜：古代メソポタミアの資料から(1)

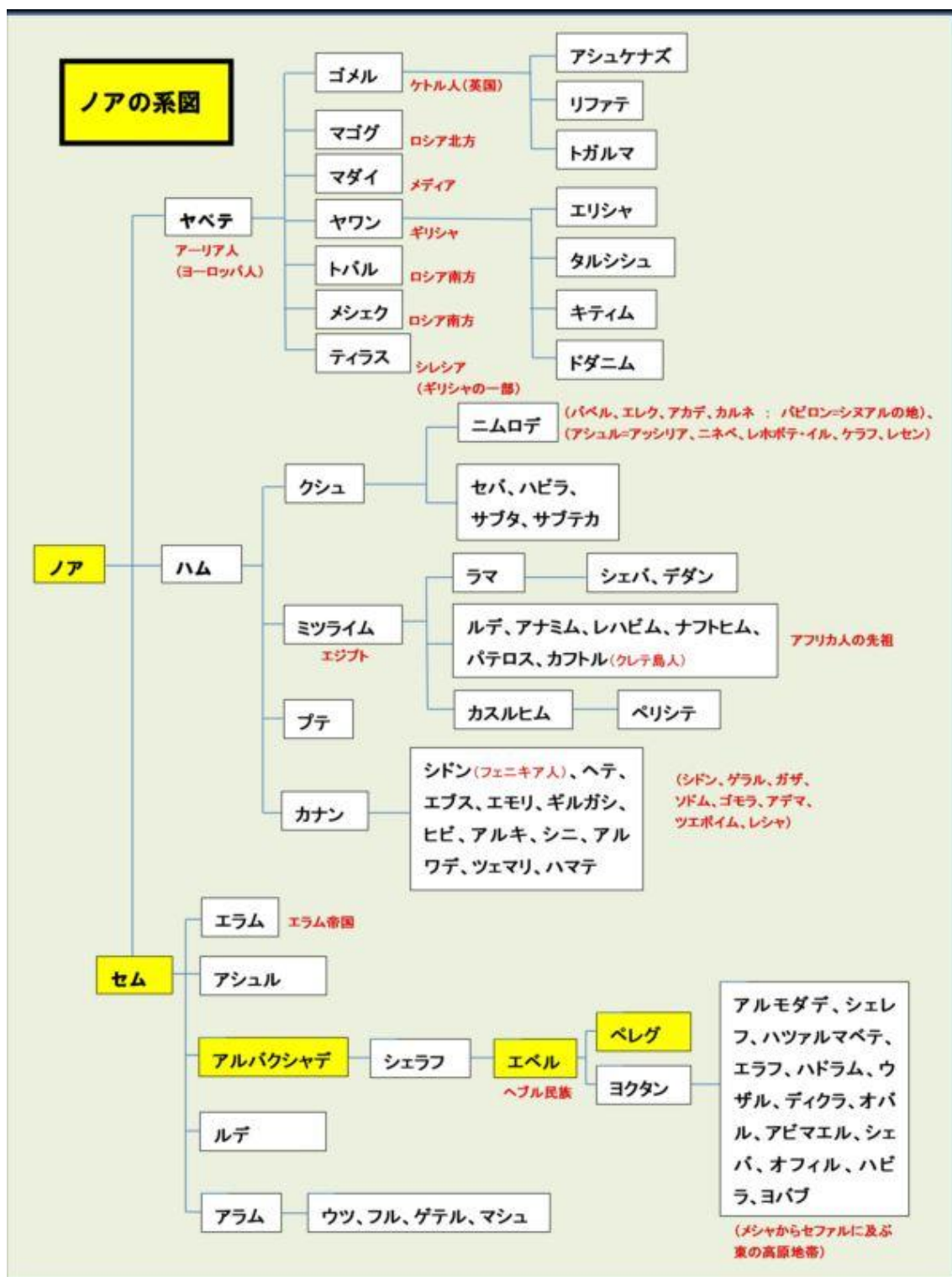
<http://hokuga.hgu.jp/dspace/bitstream/123456789/1420/1/JINBUN-31-1.pdf>)

アブラハム

アブラハムの系図

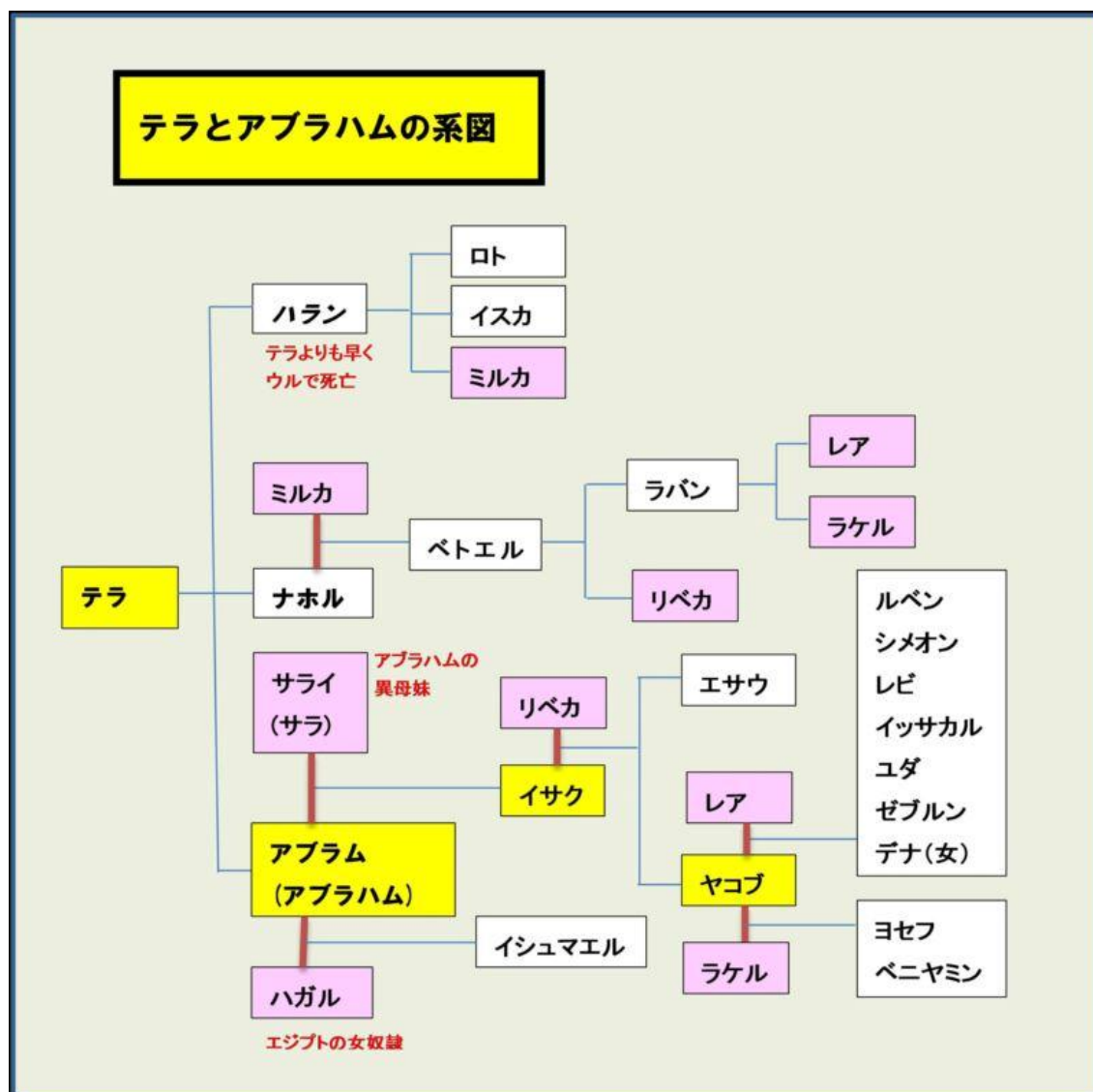
次は、ユダヤ人、イスラエル人の起源についての準備です。

創世記では、神が地に動物を出すように命じ、地がそれを出すと、あるものを zeker (男)、neqeba (女) とし、神と同じ形にし、男をアダムとし、子をつくり多く地に満ちるようにと祝福したとあります。このアダムと女性のエバのカップルからカイン、アベル、セトが生まれ、この三人の子孫が爆発的に増加し、セトの子孫のノアの時に大洪水となり、箱船に乗り込んだもののみが生き残ります。その後、ノアの子のヤフェト、セム、ハム、これまた爆発的に増加し、セム系の子孫のアブラハムに至ります。



ベレグ レウ セルグ ナホル テラ アブラム

(まなべあさらの聖書メッセージ <https://chinosiokonan.com/archives/5151>)



(まなべあきらの聖書メッセージ <https://chinosiokonan.com/archives/5317>)

ノア Noah の洪水のあとバベルの塔の後の時代のことですが、メソポタミアのカルデア (チグリス・ユーフラテス川の下流) のウル (都市) に住む裕福な遊牧民テラ Terah の子にアブラム Abram (後のアブラハム Abraham) がおりました。Noah は Noach (休息する) からくる名で、500 歳にしてヤペテ yépheth Japheth、セム Šēm Shem、ハム Ḥām Ham を生み、テラはセムの子孫となります。洪水の後に、ノアは葡萄畑をつくりますが、葡萄酒に酔っ払いテントの中に素っ裸で寝てしまいます。ハムはそれを見て、セムとヤペテに告げ、二人は裸を見ないように後ずさりして着物をかけてテントを出ました。酔から醒めたノアは裸を見たハムの子のカナン Canaan が二人の「しもべ」として仕えることになると思いました。

アブは「父」ということですから、父になってから付された名なのでしょう、ラムは「高める」で Abram (高められた父) ですが神によって高められた (信頼を得た) ということでしょう、後には多くの子孫の父となったことで、Abraham (多くのものの高められた父) という意味になるようです。彼は、異母妹のサライ Sarai (後のサラ Sarah) を妻としました。すべてノアの子ですから近親者間の結婚のオンパレ

ードとなります。また寿命が 200 歳とか 300 歳の世界となっており、神人は別として人なら半年で 1 歳、四ヶ月で 1 歳とでも勘定しなくては成立しないでしょう。**Sarai** は「喧嘩好き」とか「議論好き」、**Sarah** は「高貴な」女性とあります。

カナン

理由は記されていませんが、テラは家族と家畜を連れてウルを出てカナンを目指します。一行はハランの地に逗留しますが、テラが 205 歳で亡くなり、アブラムは神に示す地に行くようにと告げられます。創世記における神はエロヒム **Elohim**、ヘブライ語では母音を省き **אלהים** 四子音文字で **YHWH**、**YHVH** などとも表記されるようで、母音を含め **Yahweh** ヤーウェ (ヤハウエ) とか **YəHōVāH** イエホワ (エホバ) と称されたりするようです。「実在するもの」「ありありと目の前に在り、在られるもの」とされようですが、みだりにその名を口にしてはいけないともあり、発音、使用法も一定せず、長い年月とともに複数の表記となったようです。口にする時には、**אלהים** をさけてアドナイ **אֲדֹנָי**、**Ādōnay** (私の主 **Lord**) とするともあります。筆者は日本人で、**YHWH** とは無縁、使い分けができませんので神 (英語の **God**) と表記させていただきます。

アブラムは、ハラン **Hārān** (アブラムの兄弟で山人を意味し、すでに他界、ロト **Lōt** の父) の人々を含め、妻や甥、使用人、家畜をつれて旅立ち、カナンの地に至ります。旧約聖書ではハムの子のカナンの 11 部族の人々が暮らしている地ですが、カナンは古代エジプトの州でもあったようで、元来はエジプトやシュメールの方面からのさまざまな人々が暮らしていた地でそれぞれの神を祭祀する多神の世界であったようです。地中海に面しており、海上交易を含め商 (あきない) をする地でもあり、フェニキア人の先祖が有力であったようです。神はアブラムがカナンに入ると「あなたの子孫に、この地を与える」と告げました。

多神の世界に一神教を導入することは大きな軋轢を生じ、危険ですらあったことでしょう。しかし旧約聖書ではそこにはふれずサラリと、アブラムはシェケム (エルサレムの北約 50 km) にその神のために最初の祭壇を築いたとしております。

神はアブラムが多くの子孫を持つと告げていたのですが、ハランを出たのがすでに 75 歳というにサラリとの間には子がありませんでした。アブラムは更に南下しネゲブに至りましたがその地の飢饉が激しく、エジプトに向かいました。

エジプトを前にして、アブラムはパロ (ファラオ) の高官等は自分が美人のサラリの夫と分かれば殺してサラリを奪うと懸念し妹であると偽るように頼みます。信じ難いことですが、サラリは評判を聞いたパロに妻として迎え容れられることとなります (サラリはアブラムより 10 歳年下とあり 65 歳を越えた老女です)、アブラムには家畜や奴隷やラクダが与えられました。

神はそれを防ぐために疫病をパロの家に降しました (不可解な展開です)。パロは事態を知り、サラリを妻とすることを止め、アブラムに戻し、彼等を追放しました。

一行はネゲブに戻るようになりますが、アブラムは神より試練を受けます。

一神教の神

多神の民との戦いであり一神の神を奉じることの困難に耐えられるかを試すものであったと思われま

す。アブラムの一神教の神への信心は堅く、深い眠りの闇の中で、神の声「アブラムの子孫は他国に旅人となり、そこで他国人に仕え四百年苦しむことになりますが、神がその国の国民を裁き、多くの財産を得て出国することになる」と聞きます。それから10年を経ても子を産めないサライは彼女に仕えるエジプトの女(むすめ; 何故同族でなくエジプトの女にしたのか言及がありません)、ハガル Hagar を妻として与えます。彼女によって自分の子をもつことができるとしました。



牧師の書齋 <https://meigata-bokushinoshosai.info/index.php?>

Hagar とは「逃亡、見捨てられた」という意味のようで、結果から付された名でしょう。ハガルは妊娠しますとサライを見下すようになり、サライはアブラムに神にやめさせるよう頼みますが、アブラムはいかんともし難く、エジプトで嫌な目にあわせたこともあり、サライの思い通りにさせました。サライはハガルに自分の子として育てることを迫ったのでしょう、ハガルは逃げだし、荒野の泉のほとりに身を寄せました。

神の使者はハガルに「神はあなたに数え切れないほどの子孫を与える」としておられ、「神はあなたの苦しみを聞いておられる、身籠もっているのは男の子で、イシュマエル Ismā'īl (神が聞きいれた) と名付けなさい、ただすべての兄を敵に回して住むことになる」と告げたとあります。これもその原因については記されていません。

ハガルはこの神を「エル・ロイ *El Roi*」と呼んだ。El は *Elohim* の単数形系となるそうで神のこと、Roi は見ている、自分を見守ってくださいということでしょうか。生れた子をイシュマエルと名付け、イシュマエルがアラブ人の祖となります。アブラムが 86 歳のことでした。

アブラムが 99 歳のときに神がアブラムと契約を結びます。多くの子孫を与え、アブラムとその子孫が自分を神とすることで永久にカナン全地を与え、アブラムは多くの民の父、アブラハムとよばれることになる。そして契約の「しるし」として割礼(かつれい) ブリット (ברית/Brit ; ヘブライ語で契約を意味する) を行うことが求められた、とあります。

どうして割礼が「しるし」とされたかも記されておりません。割礼の起源は不明で、近東では紀元前 2 千年強前頃から行われていたとされ、ユダヤ特有のものではなさそうです。モーゼの十戒(新生宣教団)には含まれておらず、紀元前 7 世紀頃の創世記ではなく、紀元前 6 世紀バビロン捕囚から解放されエルサレムに戻ってきた頃の創世記にはあるといえます。捕囚の 60 年の間にもエルサレムに残った

人々もいたのですが、混血も起こり、一神教でない人々もあり、真性のユダヤ人である目に見える証を必要としたのかもしれませんが。生れて8日目にこの処置を施す儀式を行うことでその証が示されるものです。

古くは初子や初穂を神に捧げることが求められており、後にアブラハムも長子を神に捧げることが求められます。アブラハムの信心の深さにより、山羊を捧げることに変更されますが、その儀式と関連させる説もあるようです。長子となればイシュマエルが該当しますが、何故か言及されておらず、アブラハムの長子とはみなされていないようで、恣意的で釈然といたしません。

何と神は90歳のサライをサラと改名し、祝福して母になる、子を授けると告げます。流石のサラも伏して笑い、とても無理と思いました。神は来年に生れる子をイサク *yits-khawk'* *Isaak* (笑う) と名付けなさい、イシュマエルにはその子孫を増さしめ(12人の君を生むことになる)が、契約をするのはイサクであるとししました。

何故その別が生じるのか、ここでもその理由が示されず、サラの子であるからと想定するほかなく、その子の生まれ持つ素質や能力、あるいはその功績とは無縁のようです。すべての民をノアの子孫とすることから生じる不都合とみなす他ありません。

ユダヤとイスラエル

ユダヤというのは民族や地域を表すことばで、パレスチナ南部のユダ王国の民族、またはその地域をさしたようです。ユダはヤコブ *lakôbos*、*Jacob* と妻レアの第四子で、生れる時に、神をほめたたえることば「イェフダ (Yehûdâh)」を発し感謝したことでその名となったとされます。“ユダ *Juda*”と短縮形で呼ばれたのでしょう。その神は、ヤハウエ *YHWH*、エホバ *YəHōVāH* です。ユダは神を祭祀する族ユダヤの祖となります。

イスラエルというのはその父ヤコブ (*אִיזְרָאֵל* *Ya'akov*)、の別名です。ヤコブは生れる時に、双子の兄のエサウのかかと(アケブ、*akov*)をつかんで生れてきたため、ヤコブと名付けられました。胎内にあった時、双子は二つの民を表し、兄が弟に仕えること、兄の民が弟の民に仕えることになると神が母のリベカに語ったとあります。兄は赤くて前身が毛皮の衣のようでエサウ (*əśāw* *אֶשָׂו*) と名付けられました。

エサウは長子ですので相続の権利(長子権)があります。エサウは狩人で肉を調達し、ヤコブは農作をして作物を栽培して暮らしており、イサクはエサウに相続をさせるつもりでおりました。しかし、エサウは猟で疲労困憊し、空腹のためヤコブの煮物を求め、長子権と引き替えてしまいます。

イサクが老齢となり、目がかすむようになり、好物の鹿肉をエサウに猟することを求めます。この時にリベカは鹿肉を調理し、ヤコブにエサウの格好をさせ、イサクはヤコブをエサウと思い込み正式に長子権を承認してしまいました。猟から帰り、料理を運び、ことの顛末を知ったエサウは激怒しましたが、神の定めたことゆえどうすることもできませんでした。

エサウがヤコブを殺すと恐れたリベカは、兄のラバンの所へヤコブを避難させます。ヤコブはラバンの娘のラケルと出会い、ラバンは娘の姉のレアを先に娶らせ、続いて妹ラケルも娶らせます。彼女等は子が産めなくなると側女にヤコブの子を産ませ、大いに富を蓄えました。

富者となったヤコブ一行は帰郷の途につき、ヤボク川に辿り着き、従者達にエサウへの贈物を託し先に渡らせ、一人残ります。その夜、一人の「人」と夜明けまで組打ちとなりました。それは「人」ではなく神であり、その神は、ヤコブにこれからは *יִשְׂרָאֵל* *Yisrā'el* 「イシャラー(勝つ者)エル(神)、イ

スラエル」と名乗れと云います。ヤコブは4人の妻を持ち、娘と十二人の息子をもうけており、各々がイスラエルの十二部族の祖となったとされます。

一方、エサウはカナン人を娶ってはならないとする神の禁を犯し、二人のカナン人の娘を娶っており、いづらくなり、叔父イシュマエルの所にゆき、娘の妹マハラテを妻としたことで、神から憎まれることとなります。このことによりユダヤとアラブとの対立が深まることになったと記されています。

ユダヤ人はセム系の集団の一種族であり、人種的に特別の遺伝的特質を有する種族ではないようです。メソポタミアから渡り来て、諸国を往来する「イブリー(עברי; Ibri)」民として、ヘブライ人と称されます。多神の世界で1神のみを信仰する族としてはユダヤ人となります。また自尊してイスラエル人ともするようです。

以上については歴史的に何時の時であったかが特定されず、創世記により示される、後付け的な姿にすぎません。

旧約聖書のモーゼ五書、ヘブライ人の周辺

洪水伝説

創世記「בראשית; 初めに」、出エジプト記「שמות; 名」、レビ記「ויקרא; 神は呼ばれた」、民数記「במדבר; 荒れ野に」、申命記「דברים; 言葉」がモーゼ五書とされます。その冒頭の言葉が元の書名とされ、モーゼが述べたことが元になっているという伝承です。

これらは紀元前950年頃にユダ王国で書かれた「ヤハウィスト資料」、紀元前850年頃に北イスラエル王国で書かれた「エロヒスト資料」、紀元前7世紀のユダ王国の宗教改革時に書かれた「申命記史家資料」、紀元前550年頃のバビロン捕囚以降に書かれた「祭司資料」から出来ているそうです。400年の差があり、それぞれのおかれた歴史的状況が異なり、言葉の意味も変貌したでしょう、思想の進展も異なり、解釈も異同が生じています。

ヘブライ人が、前11世紀末にサウルによって統一され、ヘブライ王国が成立し、前1003年に第2代の王となったダヴィデがペリシテ人を破り、さらに周辺を征服した、ということは史上確認されます。しかし、ユダヤ人が何処から現われ、王国を建設し、このような五書を編纂するようになったのか？諸説ありお手上げです。古来メソポタミアやエジプトに高い文明を有する王国があり、それが衰退する中から様々な民族が独自の活動を始めた時代にあらわれた一集団とされますが、特定されません。

後期青銅器時代(紀元前1550年頃～紀元前1200年頃)当初の東地中海では、ウガリット(Ugarit)やビブロス(Byblos)などの都市国家が栄え、エジプト、ヒッタイト帝国(トルコ地域)、そしてエーゲ海の国々との海上貿易により富を蓄えていたようです。「ウガリットから発見された粘土板には『王によって海洋貿易は統制され、王は150隻もの船を保有していた』」とあります。

紀元前1400年頃の古代エジプトの医者であったネバムン(Nebamun)の墓の壁画にはサイロ・カナン地方からきた貿易船が描かれており、サイロ・カナンとは、初期に海洋都市国家があったウガリット(Ugarit)、ビブロス(Byblos)、シドン(Sidon)、ティルス(Tyrus)のあった地域。彼等はエジプト、ヒッタイト帝国、エーゲ海の各都市を周り、穀物、オリーブオイル、ワイン、羊毛や亜麻の織物、材木、馬や牛、銅、錫、青銅などの金属、ガラス、土器、鉄器、香料、象牙など多種多様なものを交易していたとあります。

地中海にあつてはフェニキア人が交易により栄えていたのですが、前 1200 年ころからは西地中海の北アフリカ沿岸や南イベリア半島沿岸に移動し、東地中海では勢力が衰えてゆきました ([水中考古学目安箱](#))。

この時期に劇的な変化を及ぼした要因として気候変動が考えられています。テルアビブ大学の花粉学者がガリラヤ湖の湖底 18 メートル下、時間にして過去 9000 年分に及ぶ堆積物を採取し、花粉のサンプルを 40 年ごとに植生の変化を追跡した結果、紀元前 1250 年ごろにオークやマツ、イナゴマメの木の数が急減していたと云います。青銅器時代後期の地中海沿岸地域には、伝統的にみられた植物に代わり、半乾燥気候の砂漠地帯によくみられる植物が増え、オリーブの木も急減しており、この地域が定期的かつ持続的な干ばつに見舞われていたと結論づけておられます ([ナショナル ジオグラフィック](#))。

中央アナトリアに現生するビャクシンの木の年輪の安定同位体記録と測定結果を用いて高分解能の乾燥記録を作成した結果、紀元前 1198～1196 年頃に通常と異なる厳しい乾燥が続いたことが判明した ([NATURE2023 年 2 月 9 日](#)) ともあり、気候の寒冷化と旱魃がこの地域のあり方を変貌させたとしています。

「メソポタミア・シリア・エジプトの文明の盛衰と環境変動 (財) 古代学協会 ([HP](#))」によれば、「メソポタミア・シリア・エジプト史上、前 1200-900 年という時期は、前代の有力国家が衰滅して次代勢力の興隆をまつ、いわば政治的な空白の 300 年である。この空白を現出した要因は一元的なものではなく、相乗的であったと考えられる。すなわち、

- 1) 新王国時代のエジプトとヒッタイトがシリアの領有をめぐる激しい闘争を繰り返し、その軍事面の荷重が両国を疲弊させたこと。
 - 2) 「海の民」が前 1200 年頃に南下し、ヒッタイトを滅亡においやったこと。
 - 3) シリア内陸部のアラム人の活動が活発化して、アッシリアが衰退したこと。
 - 4) 戦いで疲弊したエジプトに、さらに東西から異民族が侵入したこと。
- つまり、戦乱による疲弊と民族の移動・侵入とが大きな要因であったことが知られる。

これと並んで、前 1200 年頃に気候が寒冷に向かうことが古気候学の方面から指摘され、またナイル河の水位の低下も説かれている。この環境変化が民族移動を促し、農業生産力の低下をもたらせた河能性が高い。これらの原因によってもたらされた政治的な空白の実態は、分節化した社会であった。

そこで、

- 1) 鉄器という新しい素材を駆使して農業生産力を高めつつ、
- 2) 西方では海上交易や移民によって、ギリシア・ローマ文明の母体となる地中海世界の形成にむかい、
- 3) 東方ではアッシリアが回復し、騎馬兵力による強大な軍事力を擁するようになる。これらの動きが重なって、オリエント世界は再び新たな政治統合へと歩み始めたのである。」とあります。

「海の民」というのは、エジプト第 20 王朝のファラオのラメセス 3 世 ([前 1186 頃～前 1153 年頃](#)) の神殿碑文によって知られました。「ラメセス 3 世の治世 8 年、我が『海の民』と呼んでいる集団が襲来した。彼らは、西方からアナトリア、シリア・パレスチナを通り、ヒッタイト、カルケミシュ、ウガリットなどに致命的なダメージを与えながら、海路・陸路を併用してナイルデルタ地帯に南下してきた。彼らの中には、シェルデン (サルディニア)、シェクレシュ (シチリア人)、エクウェシュ (アカイア人)、トゥレシュ (エトルリア人)、リュキアからのルッカ、ペルシェト (旧約聖書に登場するペリシテ人、後にパレスチナに定住する) などが含まれていた。ラメセス 3 世の葬祭殿を核

とした神殿複合体であるテーベのメディネト・ハブの碑文の最後に「海の」という形容詞がつくために、我々は「海の民」という言葉を使用しているが、実際のところこの言葉が的確に彼らを表現しているかどうかは疑問がある。

ラメセス3世のエジプト陸軍は陸路侵攻してきた海の民を撃退し、海軍も水際でその上陸を阻止した。このテーベのメディネト・ハブのラメセス3世葬祭殿第一塔門外側には敵を打ちすえている王の場面、北壁の装飾には「海の民」との戦いの場面が描かれている（[世界史の窓](#)、[HP](#)）。とあります。

「海の民」とは、イタリア半島やバルカン半島やからギリシア、小アジアを経由してやってきた北方の種々の民とみられ、海からやってきたのですが、島嶼に生きる海洋民ではありません。彼等はインド・ヨーロッパ語族であり、その祖は黒海北方のステップの遊牧民あるいはアナトリア半島の農耕民とみられており、鉄器の文化を有しており、彼等の船の描写をみれば、「武器が剣と槍、そして盾と、通常の陸上での戦闘に使われる武器をのみを使用し…海上の戦闘では不利な装備をしている…この描写が正確なら、彼らは陸上の戦闘を得意とした民族だったと推察されます」とあり、陸戦に秀でてこれらの小アジアの都市国家からエジプトに至り侵略したようです。

ヘブライ人はサイロ・カナンの地にいたセム系の集団ですが、交易により独自の国家を形成した勢力でもなく、「海の民」にも属していません。この混乱期に、気候の寒冷化と旱魃により、食を求めてエジプトに移住したようですが、それが集団のすべてであったのか、その割合も不明のようです。

ヘブライ人の水に関する伝承は、メソポタミアの洪水神話によると思われます。世界各地に洪水神話があり、その規模は壮大で水が山を越えて天に流れ出すという表現がなされております。近代以降では、地殻変動による大陸の沈下、地震や隕石の衝突による大津波、長雨と大洪水、氷河期終了による海面上昇、地軸の変動等々、科学的な説明が求められてきました。

アトランティス伝説は、前580年頃ギリシアの賢人ソロンがエジプトのサイズの街で神官から聞いたものでした。ギリシア人はまだまだ若い民であり、人間がこれまで何度も破滅してきたことを知らない、これからも破滅すると諭されたようです。その一つが、その9000年前に海に没したアトランティス文明の伝説であり、ソロンの弟が孫のクリスティアスに聞かせ、成長したクリスティアスがソクラテスに語り、それを聞いたプラトンが「ティマイオス」「クリスティアス」に書き残したとあります。

「かつて、ヘラクレスの柱（現在のジブラルタル海峡）の外海にアトランティスという大きな島があった。その広さは、小アジアとリビアを合わせたほど広がったという。この島では、海神ポセイドンが原住民の娘クレイトオに産ませたアトラスが初代国王となり、アトランティスという国名が生まれる。島は代々10人の王によって、分割統治されていた。豊穡な野には作物が実り、象やラクダなどの野生動物がすごし、運河が縦横に走り、鉱泉と温泉が湧き、道路は舗装され、港には貿易船が溢れ、純然たる都市文明を強力な軍隊が守っていた。しかし、この理想的な国家アトランティスも、文明が爛熟してくると、倫理（モラル）が地に落ちる。アトランティスの市民たちは、物欲に走り、不道德な行為をするようになってしまう。それを見た主神ゼウスは彼らに罰を与えようと決意し、業火と洪水と津波を起こして、アトランティスを一夜と一日にして海底に沈めてしまった。こうして、偉大な文明がまた消え去り、わずか山頂近くに住む無学な羊飼いたちが生き延びた。（第41話 [アトランティスの伝説](#)、[カクヨム](#)）」

中国の書経には堯帝の時、激しい洪水がとりとめとなく広がり山を呑み高山を上り天に溢れ出て天地を乱し、民は嘆息したとある。堯の時太陽が10個現れ大旱魃となり、その反動の大雨で洪水となったという話がある。また、顓頊帝が、日月星辰を北方の天に縛り付けたため、日月星辰の動きが止まり、明るい所は目を開けていられないほど明るく、暗い所は指先すら見えないほど暗くなり、これを戻すた

めに水神共工が顓頊帝と戦った。その時に、共工が不周の山に体当りし、天柱を折り、地を繋ぐ綱を切り、日月星辰が動き出したが、天は西北に傾き、地の東南に穴があき水が流れ込んだという話もある。漢代には淮南子が天文訓でこう解説した。「人主の情は、上、天に通ず。故に、(民を)誅すること暴ならば、暴風多く、法令をまげると虫害が多く、無実の人を殺せば、国土は枯れ野と化し、令に従って収穫しないと、長雨が続く」と。つまり、人間が良き行いをすれば、天もそれに感応して順調に四時が巡る、逆に為政者や民が悪しき行いをするなら、四時が混乱する。極端な場合には、上帝は、洪水を起こして、人間を懲らしめるというものでした。

ヘブライ人のノアの洪水伝承は、アトランティスとは関連しません。人間の活動が行き過ぎて、神を顧みず横暴となり、神が限られたものを残し、すべてを滅ぼし、人間に一からやり直しせしめます。これは、多神のバビロニアの洪水伝承を一神教で解釈し直した観があります。

アトラハシスの叙事詩では、神々はアヌンナキ（上級；ティアマトとの戦いの勝者神々）とイギギ（下級；敗者神々）に分かれたれ、イギギが労働に用いられます。神殿、都市造り、灌漑水路、耕作などの労働は厳しく、これを肩代わりさせるため人間が作られます。その人間が時とともに増加し、大騒ぎをして神々を煩わせ、これを止めようとしませんが止まず、神々は洪水で滅ぼすことを計画します。アトラ（極度に）ハシス（知恵のあること）は神の声を聴くことが出来、これに備えます（アトラハシス叙事詩＜Atra-hasis＞＜1＞、＜2＞、北海学園大学 桑原 俊一 <1>）。ギルガメッシュ叙事詩（矢島文夫訳 HP:）では、ギルガメッシュは不死を求め、死の海を渡り、洪水を乗り越え不死を得たウトナピシュティム（Ut-napishtim、かの生・命を永らえる者；アトラハシスに相当）に至り、トゲのある不死の草を得ます。ところが帰還して、水浴をしている間に草を蛇に盗まれ、不死を果たすことができなかったとあります。第 11 石版が洪水伝説となります。

詳細はギルガメッシュの洪水神話（HP）を参照ください。ここでは省きます。ウトナピシュティムは不死を得て神となる多神の世界の賢者です。創世記のノアは唯一神を信じ従う義の人として描かれます。両者のおかれたシチュエーションやその対応プロセスは似ていますが、人間を滅ぼす動機も異なり、観点は全く異なります。

ヘブライ人はセム系でメソポタミアの文化を取り込んでいますが、神に関しては、別の信念を有しています。これは、ヘブライ人独自のものなのか、エジプトに入り、エジプトから出たことが関係しているのか？続いて、古代エジプトをみることに致します。

参考文献

まなべあきらの聖書メッセージ <https://chinosiokonan.com/archives/5151>

まなべあきらの聖書メッセージ <https://chinosiokonan.com/archives/5317>

牧師の書齋 <https://meigata-bokushinoshosai.info/index.php?>

モーゼの十戒 新生宣教団 <https://www.newlifeministries.jp/the-ten-commandments/>

水中考古学目安箱 <https://suichukougogaku.com/phoenicia/>

ナショナル ジオグラフィック <https://natgeo.nikkeibp.co.jp/nng/article/news/14/8480/>

NATURE2023 年 2 月 9 日 <https://www.natureasia.com/ja-jp/nature/pr-highlights/14375>

メソポタミア・シリア・エジプトの文明の盛衰と環境変動（HP）（財）古代学協会

<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-04212121/>

世界史の窓、HP <https://www.y-history.net/appendix/wh0101-058.html>)

第41話 アトランティスの伝説、カクヨム

<https://kakuyomu.jp/works/1177354054882179642/episodes/1177354054882274925>

アトラハシス叙事詩<Atra-hasis><1>、<2>、北海学園大学 桑原 俊一

<1> <http://hokuga.hgu.jp/dspace/bitstream/123456789/1502/1/JINBUN-43-1.pdf>

<2> <http://hokuga.hgu.jp/dspace/bitstream/123456789/1508/1/JINBUN-44-2.pdf>

ギルガメッシュ叙事詩 矢島文夫訳 HP; <https://www2.kokugakuin.ac.jp/~n-havens/textfile/gilgamesh.txt>

ギルガメッシュの洪水神話 HP; https://jmedia.wiki/ギルガメッシュの洪水神話/Gilgamesh_flood_myth

古代エジプト

そもそも、この地ではナイル峡谷に沿う耕作に向いた土地を **kmt** (Kemet、ケメト、Black Land、Kem は黒)と称し、それから外れた砂漠地帯を **dshrt** (Desheret、デシェレト、Red Land、Deshet は赤)と称したとあります。そして自ら、またその地を **kmt** と称していたそうです。Kyoto が **kyt**、Osaka が **osk** で通じるようなもので、石板に彫(ほ)る、粘土板を刻むには文字数を減らすことが肝要で、省略しても問題がなかったのでしょう。

右図は **Kmt** をあらわすヒエログリフ (ギリシア語の「hieros (神聖な)」と「glyphe (刻む)」からなる) です。
'Kemet Expert' によれば、黒は夜から来るもので、死後、死から蘇らせ、再生することにもかかわるとあります。

黒はまた、土地の豊饒さ、土壌の肥沃さにもかかわっており、ナイル川の毎年の氾濫により堆積されるものでした。 はワニで **Km** の音、**Kmt** のシンボルで黒を表わし、 はフクロウで **m** の音、 はパピルスで **t** の音、 は十字路で都市を表わすようです。

ナイルはセム語系統の **Nahal** からきており、川という意味とあります。ナイル川としますと、川川ということになります。ナイルは川を代表するものとして、別格の地位を占めていたのでしょう。



Understanding the colour black in Kemet

<https://kemetexpert.com/understanding-the-colour-black-in-kemet/>

Khet	Ren	Sheut šwt	jb	Ka k3	Ba b3	Ankh akh

Kmt では、母の胎内に子が宿ると、母親の血を通じてアアクフ **Ankh** (HP: 血液中に宿る原初の生命霊とあります) という成長する力が生じ **Khet** (カート、肉体) が形成されます。人が生まれる時神が **Ren** (レン、名前) を付し、本人そのもの、死後も神が当人を同定 (identify) するものとあり、墓に記された名に危害が加えられる等、名が犯されることは本人が犯されることとあります。また、カートには **khaibut** (カイプト、影、**šwt**; **Sheut**、独語のシュートともあり、黒いシルエットで表わされる) が付随しており、カートを守護するものであり、カイプトが犯されることはカートが犯されることともあります。

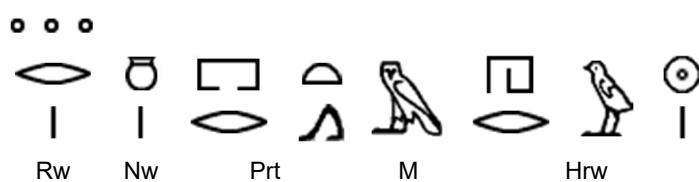
本体と本体を表わすものが対になって存在するという認識でしょう。

母親の血を受けてできる心  (jb イブ) は死後も働くもので、記憶等脳に当たる機能も有しており、生前の記憶が死後に諮問される際に応答します。U (k3 カー) がカートから離れることが死とあります。カーは命を支える機能、呼吸、飲食にも関連しており、人の生きる力、生命力となります。死後  (b3 バー) もカートから離れますが、死後世界と生前世界とを往来することができる翼のある飛行体のようなもので、死後でも、Uとで食事も性交も社会生活もすることができるとあります。死後も活動するには、虚弱な死体では困ります、生きている時から丈夫な肉体でなくてはなりません。

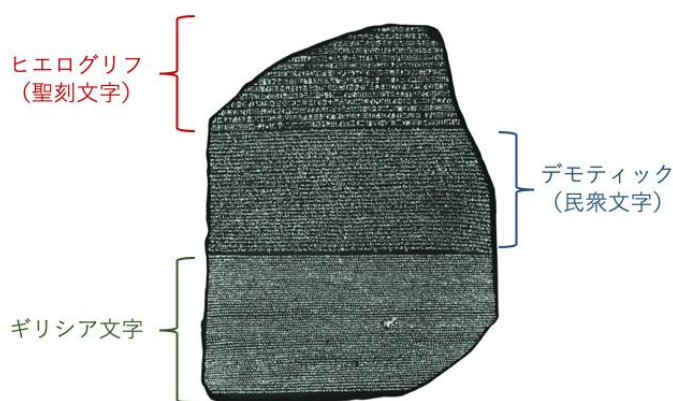
つまり、Uやは、死者の肉体に依拠し活動することができますので、墓には Ren を付し、死体を安置するのみならず、カーやバーが必要とするものを副葬し、飲食物を捧げることが欠かせません。カーとバーは、生身を運用することも、死体を運用することも出来るようですが墓のレンや死体が犯されると、カーやバーは根拠を失い滅びます。死体をミイラとし保存しなければ復活は不可能となります。これを守るために墓への道は閉ざされました (飲食物は、何処に供えられたのでしょうか?)。

死にますとは Horus (ホルス神) に導かれ Osiris (オシリス神) の裁きの場に導かれます。生前の行為への諮問が行われます。が応えるのですが、すべてお見通しの Ma'at (女神マアト) の羽根と天秤にかけられます。心に嘘偽りの汚れが付着しておりますと、天秤が傾き Ammit (アメミットという幻獣) に食われ、復活はなくなります。が天秤と釣り合っていると、 akh (アク) しUは、Aaru (アアル、葦原「あしはら」の楽園) に入り、墓のミイラに戻り復活します。

それを指南するものが「Pri-m-hrw、死者の書」であり、副葬品とされました。「死者の書」というタイトルは、ドイツのエジプト考古学者が付したもので、英文では"Book of the dead"ですが、ヒエログリフでは Rw Nw Prt M Hrw
ル・ヌ・ペレット・エム・ヘル/ Pri-m-hrw
ペレット・エム・ヘル「日の出とともに出てくるための呪文」、Kmt では冥界は地下ではなく天上にあり、「冥界から出立して下降する呪文」の意ともあります。



生前から信仰していた神々にしかるべき供物を用意し、その神々を賛美する文辞を唱え、復活への助力を求める、あるいは、その神に変身する呪文でもあるようです (死者之書上; [国会図書館](#) 死者之書下; [国会図書館](#))。対象はラー、オシリス等々の神から、ベンヌウ鳥、青鷺、バーの鳥、雄羊、黄金の隼、つばめ、蛇、ワニ、青い睡蓮等々の神々に及ぶようです。「死者の書」という原典ではなく、パターン化されたものがあり、個々の埋葬者にとって必要な文言が選ばれ作成されたようです。



[古代エジプト語のヒエログリフ入門：ロゼッタストーン読解](https://www.hituzi.co.jp/hituzigusa/2020/03/26/hieroglyph-17)

<https://www.hituzi.co.jp/hituzigusa/2020/03/26/hieroglyph-17>

ある意味では、お供え物をし、仏説阿弥陀経を唱え、極楽へと阿弥陀様に導かれるイメージですが、

このような定まった經典ではなく、祝詞（のりと）のごとく個人毎に異なる文辞となるようです。

ヒエログリフが **hieros + glyphe** というギリシア語であるのはロゼッタストーンによります。この石板は、プトレマイオス朝の紀元前 169 年ごろにプトレマイオス 5 世の頌徳碑（徳をたたえる石碑）としてつくられた石碑の一部であり、プトレマイオス朝は、アレクサンドロス大王の死後、マケドニア人の将軍プトレマイオスがエジプトに開いた王朝ですから、ギリシア語が用いられたのは当然のことです。

ギリシア人は、**Men-Nefert**（メンネフェル）を **Memphis**（メンフィス；カイロの南西）と称し、**Ptah**（プタハ神）の神殿を指す **ḥwt-kꜣ-ptḥ**（**Hikuptah**、プタハ神の霊）を「**Aigypptos**」と称し、ギリシア語の「**Aigypptos**」を都市名とし、メンフィスが主要都市であったことから、全土を指す言葉となり、英語では「**Egypt**」となりました。

メンフィス神話

Ptah プタ

Ptah に関する記述が中心となります。**Ptah** 神とされますが、**Ptah** は、元来、神以前の存在であり、神を生み出す存在でした。記述は、第 5 王朝 **Shabaka** 王（前 716-701 年）が **Ptah** 神殿に新たに刻したもの（シャバカ碑文；**Shabaka Stone**）にみられます。第一王朝 **Menes** 王（前 3400 年頃）が南北を統一し、イネブ・ヘジ（**Ineb-Hedj**、**Aneb-Hetch**；「白い壁」、後の **Men-Nefert**）に神殿を建立した時に編纂したものをもとにして、新たに神殿に刻されたものです。

「王（**Shabaka**）は、この記録を父 **Ptah** の神殿に新しく記す。王は祖先の王たちの作った記録を発見したが、それは虫によって腐蝕されていたので完全に判読し難い。それ故王は、それを新たに記録し、前の形より美しいものとし、彼の名が永続し、彼の記念碑が、父 **Ptah** の神殿において永久に存在するように（古代エジプトにおける創造神話について 同志社大学神学部教授 山崎亮）」とあります。

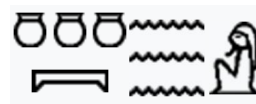
Ptah



𓆎 は神名であることを示す文字、𓆏 は p、𓆑 は t、𓆒 は h を表す表音文字とあります。𓆏𓆒 が本来の名で、文脈から、「開く」、「刻む」、「像を造る」を意味するとあります。「（プタハ）神は、その起源において、細工人、石工、金属工に崇拝された。（前掲 HP）」とあります。**Ptah** は、人間はもとより、神以上の存在であり、本来、人間の姿をしていたとは思えません。𓆎 は神名を表わす記号ですが、神として祭祀されたことで **Ptah** 神となったと思われます。**Ptah** は「心と舌」の象徴であり、**Ptah** が生み出すすべてに「心と舌」が受け継がれ、そうして生まれたものが「心と舌」で連鎖的に生成発展をつづけてゆくというイメージがあります。そして **Ptah** は変幻自在のようです。「偉大なる王座に着く **Ptah** 神よ **Ptah-Nun** として **Atum** を生んだ父 **Ptah-naunet** として **Atum** を生んだ母 偉大なる神 **Ptah** よ あなたは九神の心と舌である。

（**Ptah**）よ、あなたは神々を生んだ。・・・心のゆえに存在となり、舌のゆえに存在となって、**Atum** は形成された。」前掲 HP）とあります。

Nun は、𓆑𓆑𓆑 空、𓆑𓆑𓆑 水 𓆑 支えるからなり、深淵なる水の中に空間を支えるイメージのようにみえます。**Naunet** は不活性、その女性形とあります。



Nun



Naunet

男性形、女性形の区別をしたのでしょう。**Ptah** はすべてを含むカオス状の原初の水とされ、**Ptah-Nun** と **Ptah-Naunet** となり、**Atum** が生じます。**Atum** は光をもたらし、その唾から **Shu**（シュー、大気）と **Tefnut**（テフヌト、湿気）を生むとあり、**Atum** がすべての神の源となったとあります。**Nun** も原初の水とありますが、深淵の水の中に空間を想定し、そこに光が現れたということでしょうか。

Ptah が心にあることを舌により発し、Atum が現れたとしています。Ptah の心と舌については、「目で見たこと、耳で聞いたこと、鼻で空気を吸っ



たことは、心に伝わり、心はあらゆる決断を下す。舌は心に浮かんだことを口にする。こうしてすべての神々が誕生した。彼（プタハ）の九神が完成した。見よ、神の語るすべては、心の思いと舌による命によって生まれる。（前掲 HP）」とあります。Shabaka 王の時には、目、耳、鼻とあり、Ptah は人同様の姿とみなされていました。

第一王朝（前 3400 年頃）の時には、ヒエログリフ（石面・木面に刻まれた聖刻文字）もヒエラティック（hieratic；しっくり壁やパピルスに記された神官文字）も用いられていたとあります。「虫によって腐蝕されていた」からすれば Menes 王の時には、パピルスにヒエラティック文字で記されていたと思われる。この時代、メソポタミアの南ではウルク等の都市が拡大し、交易の記録が残され、ウルク古拙文字による記録が始まっていたとされます。当初は絵文字であったようですが、その後の文字の形態が異なり、別々に開発されていたのでしょう。

Shabaka 王（前 716-701 年）の治世からすれば、2700 年前ですから、Menes 王当時のものが残されていたものか、長い年月の間に書き換えられ前れていたものか定かではありません。デモティック（demotic 民衆文字；日常語）が使用される 7 世紀の直前の時代ですから、Shabaka 碑文のヒエログリフは Menes 王の時代のものとは相当変化していたと思われます。Menes 王の時代に記録される場合であっても、王権に組み込まれて記録されますから、その正統性を確立するために、文字のなかった長い歴史の口述伝承にも改変が加えられていて不思議はありません。

農耕や牧畜を中心とし、ナイルデルタに定住農耕村落が営まれた時代から、前五千年紀に入るとナイル上下のみならず、メソポタミアなど周辺地域との交易が始まり、相互に影響しあうことになります。前四千年紀には銅生産による青銅器時代を迎えました。交易が活発となり、都市が建設されました。都市は神により建設されたとされ、神の玉座である神殿が造られ、王は神の化身、神の子とされました。

職人の守護神とされた Ptah の神殿が、イネブ・ヘジ（Ineb-Hedj、Aneb-Hetch）に建設され、その王の業績と正統性を示す記述（神話）が神殿に記されました。イネブ・ヘジは、新王国時代（紀元前 1550 年頃）にはメン・ネフェル（Men-nefer 永遠の美）と称され、ギリシア人にメンフィスと呼ばれることとなる都市です。

Menes 王の後、三代の Djoser 王（ジェセル、前 2670-2650）の時に、初めてピラミッドが造成されました。それを可能にする天文、測量、構造、建築、採石、運搬等の知識、技術が開発されていました。加えて、大量の労働者を募集し、訓練し、彼等の生計を支えねばなりません。それを可能にするシステム、官吏組織も出来ていたことになります。

第 12 王朝（前 2040 頃）になりますと、上エジプトのテーベが中心となり、その地で信仰を得ていた Amen（Ammon、Amun、母音が略されていますので学者により名称が異なります）神がクローズアップされ、Amen-Ra（太陽神）の神殿が中核となりました。ヒエログリフ等も大量の文字が 700 くらいに標準化され、文法が定まり、微妙な表現も可能となり、古典を採録する作品が編纂されたといえます。

死後の復活は墳墓を築き、死体を保全できる王、王族、高官、神官においてのみ可能であったのですが、民衆の間にも「人は誰でも死んでオシリス神となり、来世で再生・復活することができる」とする冥界の神オシリス神への信仰が普及したとあります。死んだ時にオシリス神の助力を得る、あるいはオシリス神に変身する呪文も流行したことでしょう。

行政組織の中央集権化が進み、宰相が官吏を用いて政治を行うことができるようになり、軍事遠征も可能となりました。パレスチナ南部やレヴァントにも遠征し、交易もあいまってアジアからの流入が増加しますと、予期せぬ変動に見舞われました。

第 15 王朝（前 1663 頃）がヒクソス（「異国の支配者達」を意味する古代エジプト語の「ヘカウ・カスウト」のギリシア語形）と呼ばれる異民族によって立てられたのです。第 11, 12 王朝の頃ヒクソスによって建設されたアヴァリス市は、ピラミッド建設の労働者の居住地であったようですが、この地にはシリアやレヴァントからの流入者が多く、経過は不明ですが、彼等が力を蓄えていたようです。

1300 年以上後のプトレマイオス朝（前 350 年～）の史家マネト（Manetho；エジプト史；AIGUPTIACA、前 300 年頃）は東方から正体不明の敵が一気に乱入して征服した、「トゥティマイオスの代に、原因は不明であるが、疾風の神がわれわれを打ちのめした。そして、不意に東方から、正体不明の闖入者が威風堂々とわが国土に進行して来た。彼らは、圧倒的な勢力を以て、それを篡奪し、国土の首長たちを征服し、町々を無残に焼き払い、神々の神殿を大地に倒壊した」としています。しかし、これは考古学的発掘とは一致しないようです。第 13, 14 王朝の時デルタ地域が長期の飢饉と疫病に見舞われ、王権が弱体化し、多数の王が短期間で交代していたことに原因があるという説もあるようです。

Shabaka 王（前 716-701 年）の治世は、第 15 王朝から 900 年以上後のことですから、シュメール、アッカド、ヘブライ、レバノン、ヒッタイト、海の民等々との往来、戦争があり、さまざまな文化、制度、思想、信仰、技術が相互に影響を与えてきました。その当時の人々の意識に合致すべく、表現が改変され、言語は変化してゆくものです。Ptah が神であり、原初の水であり、心と舌で万物を創造するということが受け容れられる意識が出来上がっていたのでしょう。

Ptah が Ptah 神であり、世界の原初の水という表現には違和感がありませんか。その上、原初の水に「心と舌」があるというのも不可解です。通例「心臓」と「舌」、それに目、耳、鼻となれば、人の姿そのもので、それでいて「原初の水」は理解できません。21 世紀に生きる者にとっては、根本的に思考法を変えなくては成立しません。

世界の最初が水、全てを内包する液体とするのはメソポタミアもエジプトも同じようです。それに如何なる力が働いたかは不明ですが、それが分かります。天地に分かれ、そこからそれぞれの役割を持つ神々が生み出されてゆきます。そして人を含め万物が生み出され、神が都市に降り、人と交わり王が生まれるという展開です。

Ptah はすべてを内包する存在で、その展開を進める主体であり、思考を言葉にすることで、すべてを生み出す存在といえるでしょう。この思考は、エジプトにみられる特異な伝承であり、ヘブライの創世記に影響を与えたと思われます。Ptah はそうして Atum を生みます。そのシステムは Atum、Ennead に受け継がれます。

ところで Atum は Ptah、Nun から生まれてくるのですが、自（おのず）から生れたとあり、精液と手で（人間のようで驚きます、精液ですから性は男性となりますが？）配偶者なしで Ennead を生みます。Ennead が生むのが、神であり、その神が人間と交わり王を生みます。都市に降り、神殿に玉座が設けられ祭祀されることとなります。祭祀されることで、Ptah、Nun、Atum も神とされたのでしょう。

王は人ですから、神も人の姿に似せたのでしょうか、Ptah、Nun、Atum も神々も身体は人ですが、人を越えた力があると思われるもの、その役割を示すようなものを頭としています（あるいは頭上に冠のように付しています図）。脳の機能は心であり、頭はその本質の象徴となったようです。

ヒエログリフの英訳で、**come into being/ give life to/ gave birth to/create** とあり、生み出す、創造するイメージにとらわれます。疑問が残ります。**come into being** は **begin to exist** でもあり、存在するようになるイメージでもあります。生み出すというより、いわば電波を受信し、空中から音声や画像・データを取り出すイメージです。造り出すというよりは、内包されている特定のものを心に浮かべ、呼び出してくるというイメージとなります。

Ptah の心と舌は、命ある万物、万物に存在するとします。人間の心臓と舌にこだわりすぎてはダメなようです。万物にもコミュニケーションをする働き（心）と伝達する手段（舌）があるという考え方が近いと思われます。臓器、細胞、遺伝子、分子や原子、素粒子というレベルに至り、その働きと伝達手段を考えるようなものです。

Atum についてはヘリオポリス神話に別の伝承があり、そこで再度みることにしましょう。（参考のために、シャバカ碑文の LINES 53 - 64 英訳をみておきます）。

(53) There comes into being in the heart ; there comes into being by the tongue as the image of Atum ! Ptah is the very great, who gives life to all the gods and their kas. Lo, through this heart and by this tongue. (54) Horus came into being in him ; Thoth came into being in him as Ptah. Life power came into being in the heart and by the tongue and in all limbs, in accordance with the teaching that it (the heart) is in all bodies and it (the tongue) is in every mouth of all gods, all men, all flocks, all creeping things and whatever lives ; thinking whatever the heart wishes and commanding whatever the tongue wishes ! (55) His (Ptah's) Ennead is before him as heart, authoritative utterance, teeth, semen, lips and hands of Atum. This Ennead of Atum came into being through his semen and through his fingers. Surely, this Ennead (of Ptah) is the teeth and the lips in the mouth, proclaiming the names of all things, from which Shu and Tefnut came forth as him, and (56) which gave birth to the Ennead (of Ptah). The sight of the eyes, the hearing of the ears, and the breathing of air through the nose, they transmit to the heart, which brings forth every decision. Indeed, the tongue thence repeats what is in front of the heart. Thus was given birth to all the gods. His (Ptah's) Ennead was completed. Lo, every word of the god	53) 心の中に生じ、舌によって生じる、Atum のイメージとして。Ptah は偉大であり、全ての神々に命、神々の Ka、を与える。視よ、この心を介して、この舌によって。 54) Horus は彼（Atum）のなかに生じた。Thoth は彼のなかに Ptah として生じた。生きる力が心の中に、舌により、すべての肢体に生じ、その教えのとおり、すべての神々、人間、群れ為すもの、這うもの、そして生きる如何なるものにも、それ（心）がすべての身体に、それ（舌）がすべての口にあることになる。心が欲（おも）うことはどんなことでも考え、舌が欲（おも）うことはどんなことでも命じる。 55) 彼（Ptah）の Ennead (the epiphanies of Ptah, i.e. his Ennead （ヘリオポリス九柱神）とあり Ptah から出現し Atum となる存在）は彼の前に、Atum の心、権威ある発言、歯、精液、唇、手としてある。この Atum の Ennead は彼の精液、手から生じた。確かに、この（Ptah）の Ennead は口の中の歯と唇であり、すべてのものの名を唱え、それで Shu と Tefnut が彼（Ennead）として生まれ、 56)（Ptah の）Ennead を生み出した。両目の見ること、両耳の聞くこと、鼻からの呼吸、それらは心に伝達され、すべての判断をもたらす。実に、舌は、それから、心の前にあることを次々と起こす。かくして、すべての神々が生みだされた。かれ（Ptah）の Ennead（9 柱の神々）は完成された。
--	--

came into being through the thoughts in (57) the heart & the command by the tongue. Thus all witnessing faculties were made and all qualities determined, they that make all foods and all provisions, through this word. {Justice} is done to him who does what is loved, {and punishment} to him who does what is hated. Thus life is given to the peaceful and death is given to the criminal. Thus were made all labor, all crafts, the action of the arms, the motion of the legs, (58) the movements of all the limbs, according to this word which is devised by the heart and comes forth by the tongue and creates the performance of everything. > There came the saying that Atum, who created the gods, said concerning Ptah-Tenen : "He gave birth to the gods." From him every thing came forth : foods, provisions, (59) divine offerings, all good things. Thus Thoth knew and recorded that he is the mightiest of the gods. Thus Ptah was satisfied after he had made all things and all divine words. He gave birth to the gods, he made the towns, he established the nomes, he placed the gods in their (60) shrines, he settled their offerings, he established their shrines, he made their bodies according to their wishes. Thus the gods entered into their bodies of every kind of wood, of every kind of stone, of every kind of clay, in every kind of thing that grows upon him (61) in which they came to be. Thus all the gods and their kas were gathered to him, content and united with the Lord of the Two Lands. > The Great Throne (Memphis) that gives joy to the heart of the gods in the House of Ptah is the granary of Tenen, the mistress of all life, through which the sustenance of the Two Lands is provided,	視よ、その神のすべてのことばが、 57) その心にある思考、そしてその舌による命令から生じたことを。このようにして、すべて視てきた能力が作られ、すべての質が定められ、この言葉からすべての食糧、すべての供給物が造られた。{公正}は愛されることを為す者に行われ、{そして 刑罰}は憎まれることを為す者に行われた。このようにして、生は平和な者に与えられ、死は犯罪者に与えられる。このようにすべての労働、すべての工芸、腕の活動、足の動作、 58) すべての肢体の運動、はこの言葉により起り、それは心で考えられ、舌で表わされ、すべてのありようを創造する。 > このようなことが伝えられてきた、神々を創造した Atum が Ptah-Tenen についてこう云った、「彼が神々を生み出した、「彼からすべてが現れた；食べ物、供給物、 59) 神々への供物、すべての良き物。このようにして Thoth (Ptah の書記) は認識し、彼が神々のなかで最強であると記録した。こうして、Ptah はすべての物、すべての神聖な言葉を創りだしたことに満足した。 彼は神々を生み出し、それぞれ都市を造り、それらの名を定め、 60) それらの神殿に神々を置き、神々への供物を定め、それらの神殿を建て、神々の要望に応じてそれらの身体を造った。このように、神々が、あらゆる種類の木、あらゆる種類の石、あらゆる種類の粘土、彼を好むあらゆる種類の物の身体に入り込み、 61) そこに居ることとなった。こうして、すべての神々とそれらの Ka は彼に集められ、満足して、二つの地（上下エジプト）に結びつけられた。 > （メンフィスの）偉大なる王座は、「Ptah の家」の神々の心に喜びを与えるものだが、Tenen、すべての生命の女主人、の穀倉であり、そこから上下双方の地に糧が供給されます。
---	---

(62) owing to the fact that Horus was drowned in his water. Isis and Nephthys looked out, beheld him, and attended to him. Horus quickly commanded Isis and Nephthys to grasp Horus and prevent his drowning. (63) They heeded in time and brought him to land. He entered the secret portals in the glory of the Lords of Eternity, in the steps of him who rises in the horizon, on the ways of Re at the Great Throne. (64) He entered the palace and joined the gods of Tenen Ptah, Lord of Years. Thus Horus came into the earth at the Royal Fortress, to the North of this land to which he had come. His son Horus arose as King of Upper Egypt, arose as King of Lower Egypt, in the embrace of his father Horus and of the gods in front of him and behind him."	62) Horus が彼の川におぼれたということによる。Isis と Nephthys が危ないと、彼を視て、彼に対応し、Horus はすぐさま Isis と Nephthys に Horus を掴まえ溺れさせないようにと命じた。 63) 彼等が聞き入れたことが間に合って、陸に引き揚げた。彼 (Horus) は永遠の王達の栄光への秘密の入り口に入り、地平線から昇る者の階段、偉大な玉座への Re (太陽神) の途上にいた。 64) 彼はその宮殿に入り、Tenen Ptah、歳月の主、の神々に加わった。こうして Horus は王の要塞の地に至り、この地の北方に至った。彼の子である Horus が上エジプトの王として起こり、下エジプトの王として起った。かれの父の Horus と彼の前後の神々とは抱き合うなかで。
---	--

ヘリオポリス神話

Atum アトゥム

この地は *iwnw* (*iunu*)と表記され、*Awnu* とか *Annu* と呼ばれていたとされます。ヘブライ人は *On* とか *Āwen* とか *Amos* と称し、ギリシア人が *Ἡλιούπολις* (*Heliopolis* ; *City of the Sun*) としました。

Iwnw は母音を付すと *ja:wunaw* 、**ʔa:wnu* と推測され、*Awnu* とか *Annu* とも発音されますが、*The pillars* を意味します。この地で柱といえば *Obelisk* (オベリスク) が想記されます。太陽がありますから、ここは *Atum* (*Ra-Atum*) の神殿 (*House of Ra-Atum*) の都市と



iwnw

なります。

パレルモ石の王の列伝によれば第五王朝 *Userkaf* 王 (ウセルカフ王、前 2494 年 - 前 2487) の時に、*iwnw* の諸霊にパンやビール等及び王の領土の一部を献げるというような記述があり、この頃にはすでに神殿があったとされます。民話では、神殿の神官長の妻と *Re(Ra)*神が交わり、第 5 王朝の最初の三人の王が生まれたとされ (前掲、古代エジプトにおける創造神話について) 神殿は古くからあったことになります。

第 6 王朝 (前 2345 以降) の *Mer-ne-Re* (第 3 王) と *Nefer-ka-Re* (第 5 王) のピラミッド内に刻されたテキストに *Atum* に関する記述があります。

O *Atum-Kheprer*, you became the high hill (*qay qaa*); you rose up as the benben stone (*bnbn*) in the mansion of the *benu*-bird (*hwt benu*) in Heliopolis. You sneezed out *Shu*, you spat out *Tefnut*, and you set your arms about them as the embrace of *ka*, that your *ka*, that your *ka* might be in them.

オー*Atum-Kheprer* よ、汝は *qay qaa* (高い丘) となった；ヘリオポリス (*iunu*) の *hwt benu* (*benu* 鳥) の館の *bnbn* (*benben* 石) を立ち上げた。汝は *Shu* をくしゃみで吐き出し、*Tefnut* を睡 (つば) と共に吐き出し、彼等に腕をさしのべ *ka* の抱擁、汝の *ka* を彼等の中にあらしめんとした。

Alan F. Alford The Midnight Sun ; The Death and Rebirth of God in Ancient Egypt

その時代では、*Atum* が作りだしたもの (八神 *ogdoad* オグドアド) が擬人化されていること、

Atum が”Lord of ALL (全ての主) “、”Lord to the Limits of the Sky (限界なき主) ”とされており、Alan F. Alford は “The Midnight Sun” において Atum には ”to not be” と ”to complete” の意味があるとしています。

Atum は混沌とした深淵 (Nun) から出てくる陸、*qay qaa* (高い丘) の館に礼拝の対象となる *bnbn* 石柱を立ち上げます。*bnbn* 石柱は Atum の象徴とされ、lunu “Pillar City” を意味したようです。Alford は、これを混沌とした深淵から phallus (男根) が出てくるイメージとみています。精液と手で Ennead をつくりだす、これを自慰とみなすようですが、それでは Atum がすでに人の身体となっており、昨日とか明日という形容とは関連しません。精液と手というのは人を前提とした後の解釈と思われます。

ここでは、Atum は、くしゃみで Shu、唾で Tefnut を吐き出し、彼等を抱きしめ ka を送りこみます。これも人の形を前提としています。Shu は大気、Tefnut は湿気、彼等は Twin (双子) とされ、風と雨、旱天と雨天、太陽と月といった対のイメージとなります。Kheprer は ~~カ~~ スカラベ (ball of dung 「糞玉」から自生した昆虫「こがね虫」と考えられていた) のことで、Atum-Kheprer は Atum も Kheprer のごとく、何かによって生み出されたものでなく、自生したことを示すものとなっています。

Atum は王朝時代以前から太陽神として祭祀されていたとあります。Atum と同一視される Re(Ra) は、太陽でありどこにでも現れるもので、ここに記されている Henennesut (Hwt-nen-nesu、ヘラクレオポリス、Heracleopolis、メンフィスの南 100 km) や Khemenu (hmnw、ヘルモポリス、Khmunu “City of the Eight” Hermopolis、メンフィスとテーベの間) のみではないでしょう。lunu の神官が Atum を lunu の太陽神、都市の祖神とする Atum の獲得競争に勝利したと思われます。神官長の妻と Re(Ra) 神が交わった子が王の祖であるというプロパガンダを強力にすすめ、*bnbn* 石柱がその決め手の役割を果たしたのでしょう。*bn* ベンは何回も *bnbn* は「何度も何度も、永遠に」の意とあります。そこに Atum がベンヌ鳥 (ラーの魂) として舞い降りたとか、水中のラーを暖めて孵化させたという話しも作られたようです。

Mine is all in existence alone in Nun, I am Ra in his rising, first in ruling what he made. What does it mean? It means Ra in his rising when first ruling what he made, It means the first rising of Ra in Henennesut, when there was the creation of the supports of Nun when he was on the high ground which is in Khemenu, when the children of the rebel were destroyed for him on the high ground which is in Khemenu. I am the great god who comes to be of himself, there is water, there is Nun, father of the gods What does it mean? It means Ra creating his body, when those god in the following of Ra took shape. I am the unopposed among the gods What does it mean? Atum in his sun-disk Another version:	私の存在はすべて、Nun の中に単独で存在している 私はその昇る Ra、まずは作ったものを支配しながら どういうことか？ それ昇りつ、まずは作ったもの支配する Ra を意味する、 Henennesut に Ra の最初の上昇を意味する。 Nun のたすけによる創造のときであり Khemenu の高い丘に居たときのこと 反抗する子供達が彼のために滅ぼされた時のこと Khemenu の高い丘で 私は自身で存在することになる偉大な神である。 水があり、Nun、神々の父、がいる。 どういうことか？ Ra が彼の身体を作ったことを意味する。 Ra に続く神々が形を持つときに 私は神々の中で並ぶものがない。 どういうことか？ 彼の太陽の円盤中の Atum 言い換えれば
--	---

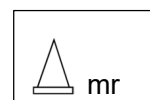
It is Ra in his sun-disk shining from the eastern horizon of the sky. Mine is yesterday, I know tomorrow What does it mean? Yesterday is Osiris, Tomorrow is Ra, on that day on which the rebels against the Lord of All are slaughtered, and when his son Horus was appointed.	空の東の地平から光り輝く太陽の円盤のなかの Ra である。 私の存在は昨日、私は明日を知る どういうことか？ 昨日とは Osiris 明日とは Ra である。 その日に、すべてのものの主に反抗した者等が殺戮される。 そしてかれの息子の Horus が（Lord に）指名された
Book of the Dead Chapter 17 UCL Digital Egypt for Universities	

死者の書第 17 章は第 18 王朝～21 王朝（前 1567～前 1085 年）で用いられた死者の書によるものですが、その原本は中王国（前 2050 年～1786 年）に遡る事が出来るとあります。いずれにしても、この時には、Ra(Re)がすべてを作りだした太陽神として重視され、Nun → Atum → Ra(Re) という系統が定着していたようです。

17 章の英文では、I は Atum で、his、he は Ra(Re)。Atum が Ra(Re)として現れたのは、Khemenu の丘で、Nun から自生し、Nun に支えられすべてを作りだし、反抗するものを倒し、Henennesut で、はじめてすべてを支配したとしています。

Nun は原初の水とされ特定の形はないものでしょう、Atum はそこに突起物のように自生します。振動と摩擦を伴い、いわば海底火山がどんどん (bnbn) 隆起し、噴火するがごとく、深淵のものをさまざまな形にして放出する感があります。ものが現れることは時差を生み、過去、現在、未来を意識させます、昨日、明日は、死から生、生から死、死から復活の時の方向となります。復活は死者の究極の願望です。

朝東から昇り、夕に西に消え、また朝に復活する太陽 Ra(Re)をその象徴としたと思われます。その円盤（太陽）の中に Atum（元来、光）が存在しています。



ピラミッド

死後も (jb イブ) (b3 バー) (k3 カー)が活動をすると思える人々にとって Ra(Re)は復活の象徴となります。三代の Djoser 王（在位：紀元前 2668 年～紀元前 2649 年）がピラミッドを建設したとありました。Pyramid はギリシア語の πυραμῖς; pyramis ピュラミス、三角形のパンによるとあり、ヒエログリフでは をミル mr とし、 mn-nfr でメンフィス（Men-nefert）のピラミッドとなるようです。mr の原義は鋤で掘る、耕す、愛する、崇敬する等の意味があり、 では昇る意味からくるようです。

高さ 10m、一辺 63m 規模の正方形で企図されたものが、結果的には、高さ 62m であり、東西 125 m、南北 109m の長方形で階段状のピラミッドとなりました。これを設計したのはトート Thoth の神官であり、祭儀文朗読神官長のイムホテプ Imhotep とされます。

トートはヘルモポリスで知恵の神として信仰されており、その妻（妹ともされる）がセシャト Seshat は測量の精度や時間を管理し記録する神とされます。セシャトの女性神官はナイルが氾濫した後、測量を行い土地の境界線を再確立することに携わり、数学や関連知識を蓄える訓練を受けた他の職員を監督したとあります。

イムホテプはこれらの知識とともに医師でもあり、疾患を治す力が崇められ、後に神とされました。メソポタミアの出身とする説もあり、「天の舟」で神が停泊する神殿ジックラト（日干煉瓦で築かれた階段ピラミッド状の神殿）にも通じているとみなされたのでしょう。メソポタミアでは、ジックラトは地上に突き出る山々[▲]と Kur と同じく生命力の象徴でした。ピラミッドも同様であり、Ra(Re)を賛美し、復活を遂げる場となるのでしょう。

セド祭を行う施設がセットになっています。階段状のピラミッドの聖域内には、セド祭用の中庭と祭殿があります。上・下エジプト全州の守護神列席の下で上エジプト王および下エジプト王としての王位更新であり、臣侯たちによる臣従の誓いと貢物の献上、下賜品の授与も行われます。

王位更新は王の死と復活を象徴する儀式、神事となります。即位 30 年を迎えますと、王の活力が失われるとされ、活力を回復させる儀式となります。前夜に王の像が埋葬され、王が死んだと見なされます。当日には王が現れマラソンをしてその王の活力が復活したことを示します。走行儀式とあり、王であるためには、健康で丈夫な身体を持主でなくてはならず、さもなくば、復活を求めることができません。以降 3 年毎に行われますが、即位 30 年に満たない王の方が多いようです。

参考文献

Understanding the colour black in Kemet <https://kemetexpert.com/understanding-the-colour-black-in-kemet/>

野次馬集団 魂、霊魂(Soul) [Gr.yuchv] <http://web.kyoto-inet.or.jp/people/tiagio/antiGM/soul.html>

The Ancient Egyptian concept of the Soul Egypt Museum

<https://egypt-museum.com/the-ancient-egyptian-concept-of-the-soul>

古代エジプトの神々と神話 <https://ai-l.jp/HtEgy/chap6body-kami2.html>

ヒエログリフ解説 (27) 「死者の書」を読む Nilestory.com 小柳 康子 http://www.nilestory.com/egypt_hiero27.html

古代エジプトにおける神・人・神話 田澤恵子

<https://kansai-u.repo.nii.ac.jp/record/2000390/files/KU-0040-20180331-02.pdf>

古代エジプトにおける創造神話について 山崎 亮 <https://doshisha.repo.nii.ac.jp/records/11187>

エジプト・ヒエログリフ Egyptian Hieroglyphs の文字一覧 <https://0g0.org/category/13000-1342F/1/>

古代エジプト語のヒエログリフ入門：ロゼッタストーン読解 <https://www.hituzi.co.jp/hituzigusa/2020/03/26/hieroglyph-17>

On NUN Studies in Ancient Egyptian Religion & Philosophy <https://www.sofiatopia.org/maat/nun.htm>

On the Shabaka Stone Studies in Ancient Egyptian Religion & Philosophy <https://www.sofiatopia.org/maat/shabaka.htm>

シャバカ碑文の LINES 53 – 64 英訳 <https://www.sofiatopia.org/maat/shabaka.htm>

死者の書 国会図書館 上巻 <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/946596>

下巻 <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/946597>

THE BOOK OF THE DEAD The Papyrus of Ani by E. A. WALLIS BUDGE[1895]

<https://sacred-texts.com/egy/ebod/index.htm>

The Book of the Dead: translation of the first chapter

<https://medium.com/@sam.campitiello/the-book-of-the-dead-translation-of-the-first-chapter-e06a7ebf9689>

Ancient Egyptian Reading https://sofiatopia.org/ancient_egyptian_readings.html

[The Midnight Sun: The Death and Rebirth of God in Ancient Egypt - Alan F. Alford - Google Books](#)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/ガーディナーの記号表>

[Book of the Dead Chapter 17](#) UCL Digital Egypt for Universities

☒ [egyptian-gods-and-goddesses-set-flat-vector-44110876.jpg \(1000×1080\)](#)

創世記 (ヘブライ語) בראשית (ギリシア語) ἐνέσσις (英語) genesis

ヘブライ語のイメージ

בראשית ברא אלהים את השמים ואת הארץ、英語では **In the beginning God created the heavens and the earth.**とあり、日本語では、**はじめに神は天と地とを創造された**、とあります。

ヘブライ人の創世記もメソポタミア、エジプトの神話に影響を受けています。全知全能の神が何も無いところから「天と地」を造りだした、無から有を産み出したような考察ではありません。

世界の賢者といわれる人々は天文観測を重ね、世界のはじまりについて思索を重ねたのでしょう。洪水を起こす大量の雨が空から落ちてくる。天の川、天池、天海を想定せざるをえませんでした。雨の少ない所では、地下から水が湧き大河となるごとく、地下の大洋を想定せざるを得ませんでした。海は広大で底知れぬ深さがあります。創世記もその疑問に応えることから始まっています。

ヘブライ語では右から左に読みます。ヘブライ語にはカナンで話されていた言語の一つで古典ヘブライ語（聖書ヘブライ語）とバビロン捕囚後の文書（ミシュナー・ヘブライ語）の別があり、表記されるのは子音のみで発音時には母音を加えられるとあります。בְּרֵאשִׁית בָּרָא אֱלֹהִים אֶת הַשָּׁמַיִם וְאֶת הָאָרֶץと下部に発音の記号が付されるものもあります。

בראשיתは「はじめに」、בראは「創造した」、אלהיםは「神」、אתは「前置詞～を」、השמיםは「天」、ואתは「～と～を」、וはand、הארץは「地」となるようで、「地、と、天、を、神が、創造した、はじめに」、と右から左の語順で、動詞の次に主語が置かれるようです。

בראはバラ bara と発音され、作る意味の単語には עשה (アーサー-asah) というのがあり、bara は主語が神の場合に限定されるとあります。英語訳では create です。Create は Oxford Dictionary では、「Of a divine being or natural agency. transitive. To bring into being, cause to exist; esp. to produce where nothing was before. (神、絶対者、自然の力に関するもの。他動詞。～を生じさせる、存在せしむ；特に無かった処に生み出す)」とあり、近代人の常識的なイメージです。創造はコトバンクでは、「① 新しいものを自分の考えや技術などで初めてつくりだすこと。② 神が宇宙、万物をつくること」とあり、日本人のイメージもこうです。

それで、「天と地を創造する」という訳になっております。ヘブライ語には不案内ですが、どうもそのようなイメージとは違います。

世界は神によって創造されたものか？

まず先頭にある בראשית はベレシート bere(i)shit と発音され、be が in、re(i)sh が heads、it が of に当たり in head of の並びで In the beginning となり、これには違和感はありません。

次の השמים はハシャマイム hashamayim で、ה ha と שמים shamahyim とからなり、ha は定冠詞

the にあたり、שמים は מים (マーイイム mayim 水) と ש (シン shin) からなり、ש は激変、燃焼、変身という意味があり、שמים はいわば変化した、蒸発、変身した水のごときイメージです。これを heaven とか天と訳しておりますが、字義どおりですと、変化した水であり、大気が満ち、宇宙に広がる天空ではありません。

地は、הארץ (ハアレツ haerets) で、ה ha と ארץ erets からなり、ארץ は女性形とあります。ヘブライ語では名詞には性別があり、-ā, -at, -et 等がつくと女性形になるそうです。שמים は男性形です。天は父、地は母みたいなイメージなのでしょう。erets は地 earth、土地 land と訳されています。しかし、物理的なものというよりは、人の住むところ、神の霊が宿り、神を信じる人々の居るべき域 area でもあるようで、所謂「約束の地」につながるのでしょう。

The earth was without form and void, and darkness was over the face of the deep. And the Spirit of God was hovering over the face of the waters. 地は形なく (תהו תוף tóhu)、むなく (בוהו בוף bóhu)、やみ (חשך חוף khoshekh) が淵 (תהום תום t'hóm) のおもて (פני פני p'nei) にあり、神の霊 (רוח רוף rewh) が水 מים (マーイイム) のおもてをおおっていた (מרחפת מרחפת merakhfet)」と続きます。

תהו תוף は茫漠たるさま、בוהו בוף は何もないこと、חשך חוף は暗く何かを湛 (た) えているさま、תהום תום には、הום ームがあり派生語に מים マーイイムがあり水のようなものが溜まっている状態、רוח רוף は風のような神の息吹、מרחפת מרחפת merakhfet は漂うさまとあります。

つまり erets は形ない淵 t'hóm で闇 khoshekh が表面にあり、神の霊が水の上に漂っている状態、闇のなかになんらかの息吹が浮遊するもやもやした水溜まりであったようです。神はそこに何かの変化が加えられたのでしょう、上にあがった水分が שמים シャマイムとなってゆくようです。

天地創造とされますが、何もない処から天と地を創りだしたものではなく、この湿気に満ちた闇の淵を天地に分けたようです。ברא bara は separate の意味でもあり、神が淵の水分を分離させ天の水と地の水に分け、シャマイム shamahyim ができあがってゆくようです。

中国人は混沌としたもののなかで軽いものが上になり、重いものが下になり天地が出来たとみられるようです。ここでは上も下も水ですから、おそらくは、海洋人の伝承を取り込んだものかと思われます。次に行く前に創造主とされる神をみておきましょう。

神 אלהים に形はあるのか？

אלהים は、母音を加えられエロヒム elohim と発音されています。אלה (elóah エロアー) の複数形ですが בראが三人称の単数形なのでこの אלהים は単数扱いとあり頭が混乱します。אלה はミシュナー・ヘブライ語では、אל (エール El) となるとあります。アラム語ではアッラー aláh となるそうです。

אלה は神のことですが、「実在するもの」「ありありと目の前に在り、在られるもの」の意味とあります。ただ、みだりにその名を口にしてはいけなとあり、長い年月とともに表記、発音が一定ではなくなったようです。口にする時には、אלהים をさけて אדוני、(アドナイ Ādōnay ; 私の主、Lord) とするともあります。

アルファベットでは אלהים は、YHWH, YHVH 等の四文字で記され、Yahweh ヤーウェ (ヤハウエ)、YəHōVāH イェホワ (エホバ) などとされており一定していません。ヘブライでは神の形に似せて人を

造ったとしており、ヘブライ人の YHWH は人の形となります。

一神教の神は、多神のなかでそれを統一する最高神、ギリシアのゼウスのような神ではないようです。偶像崇拝を否定するものですから、YHWH を人の形とするとはいえ、具体的な形を持たすことには慎重であったはずで、目なくして見、耳なくして聴き、口なくして語るというイスラムの考え方が、אלהを継承しているようにみえます。אלהを普通名詞、אלהיםを固有名詞（唯一無二の特定の名称）とする区別があるようです。

古代のエジプトやシュメールでは多神で、偶像崇拝が当たり前でしたから、それを否定するような神を主張し維持することは、それ等の民とは大変な軋轢を生み出したことでしょう。

天地の変動は如何にして出来たのか？

「神は『光あれ』と言われた。すると光があった」、英語では **God said: 'Let there be light.' And there was light.**、とあります。神が、言う יאמר (ヨーメル yómer)、在る יהי (イエヒー je'hi)、光 אור (オール or) という語からなります。

יהי je'hi は、let there be (それが) 在る (ようになりなさい) と訳されており、あきらかにする、本来あるべきようになれというニュアンスで、闇 חשך (クホーシェク khoshekh) から光を分けた יבדל (ヤヴデル Vayavdel set apart) とあり、闇というと全く光がない、暗愚、絶望というイメージがありますが、khoshekh はそうではないようです。

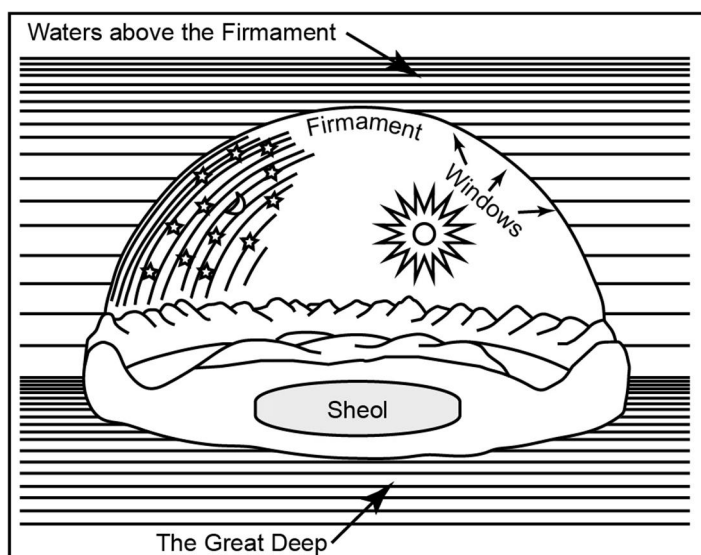
電気や電波を利用出来るようになり、何も見えなく、何も聞こえないところから、受信機を使えばある周波数の電波をキャッチし、音や映像を再生することが出来るようになりました。神は光を創り出したものではなく、Khoshekh から取り出したようです。太陽が出れば光が現われる、火を燃やせば光が現われるというものでもなく、言葉をかけることで、光を呼び出したようで、その量により差をつけています。この光は男性形で、神は、この光を טוב (トーヴ tob ; good 良いもの) としております。ぼんやりしたものからはっきりしたものを取り出し、事態を明るくする、知恵をもたらすということで喜ばしきものを象徴しているようです。

Tob の量により、昼 יום (ヨム yom)、夜 לילה (ライラ laylah)、夕暮 ערב (エレーヴ érev)、朝 בקר (ボーケル bóqer) が決まり、この推移で יום אחד (ヨム エクハッド yom ekhád) 一日となる。Yom は周囲がよく見え、外で活動できる時間帯で、bóqer や érev を含めることもあるようですからその時間帯、半日、一日ともなるようです。外では周囲が見にくく、内に籠もり、寝ている時間帯が laylah となるのでしょう。laylah には火や星も月もありますから全く光がないものでもありません。yom ekhád は最初の一日ですから、世界の始まり、歴史(時間)が始まったことをも象徴しています。

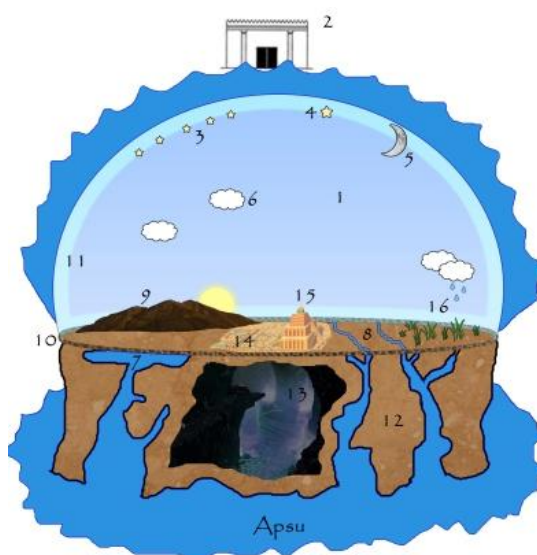
「神はまた言われた、『天空 רקיע (ラキア raqiya) が諸々の水 מיםの真ん中になれ יהי (イエヒー、je'hi 在るようになれ)。水 מיםと諸々の水 מים:הとを分わけよ』。そのようになった。神は大空を造 (ヤーアス ya'as) くって、大空の下の諸々の水 מים:הと大空の上の水 מיםとを分けられた。神はその大空を שמיםと名づけられた。」

大空 רקיע raqiya ですが、これは動詞 רקע (ラーカ raká) からきており、金属を叩いて広げる意味があるそうです。水と水の間を開くは、モーゼが海を開いたようなものです。叩いて広げた金属を天蓋としてその上の水を支えたことで、raqiya が出来たのでしょう。英語では、**Let there be a firmament in the midst of the waters, and let it divide the waters from the waters.**とあり、raqiya を firmament と翻訳

しています。「支持、強化」という意味のラテン語 **firmus** からくるとあります。「The arch or vault of heaven overhead, in which the clouds and the stars appear (頭上の天のアーチあるいは半円筒で、雲や星が現われる処)」ですから上下の水を支え広がった空間であり、その上の水の部分が **shamahyim** であり、これを **heaven**、天と訳しますと近代人の感覚とマッチしません。空から大洪水を起す水が落ちてくるのですから、天海、天湖、天池、天の川があると思うことも、その大量の水を何かが支えているとするのももったもなことです。



[EMMANUEL BAPTIST CHURCH](#) の図
[The Firmament: What Did God Create on Day 2? - Emmanuel Baptist Church](#)



Enuma Elish References to Depiction of the Cosmos
[Enuma Elish References to Depiction of the Cosmos](#)

水が分かれてゆく過程については、神が諸水に **raqiya** が在 (יהי *je'hi* イエヒー) るべきようにあれと言ひ、**raqiya** が現われると上下に諸水が分 (מַבְדִּיל *mavdil* マヴディール) されます。神の言葉が内在するものを現出させ、新たな現実が展開するようです。עשׂ *ya'as* を **made** 造った、とされていますが、"may he do"、עשה *asá* では"he will do"とされており、結果的には、**raqiya** に諸水をわけさせたということになります。

「神はまた言われた、『天の下 of 諸々の水は一所ところに集 **יקוּוּ** (*yikavu* イィッカヴー) まり、乾いた所 **יַבֶּשֶׁת** (ヤッバシャー *yabashá*) が現われよ』。そのようになった。神はその乾いた所を地 **אֶרֶץ** (エレッツ) と名づけ、諸々の水の集まった所を海 **יַמִּים** (ヤメム *yomim*) と名づけられた」とあります。

つまり、水と水の間に空間が現われると、空間の下の水を一ヶ所に集まらしめ海とし、乾いた所を地 **yabashá** とした。地 **Land** というのは **erets** より **yabashá** の方が近代人のイメージに近いでしょう。これが二日目のこととなります。

さて、諸水はどこから出てきたのでしょうか？当初からあったもののようで神が作り出したものかどうかは不明です。水中で風船が膨らむように水を分けさせましたが、その空間は真空ではないのですから、如何にして大気が満たされたかも不明です。人の形をした神が吹き込んだならば、大変な肺活量ですが、この神は言葉によって **raqiya** により満たさしめたのでしょうか。

その状態から天の下の水を一ヶ所に集め乾いた所を作るには、当初から淵にデコボコの地形がなければ、不可能でしょう。諸水が上下に分かれる過程で **yabashá** が露出し、低い処に水が落ち込んでいったのでしょうか。水が全土を覆っている想定は、これが編纂された時、ノアの洪水が念頭にあったように思われます。

この神は何もないところから天地を創造したという存在ではないようです。大気も土地もすべてが暗い淵にあったのでしょうか。言葉の力を有した存在が語りかけてそれぞれを動き出させたようにみえます。

すべては、「神が言う **אָמַר (yómer)**」ことによって起こっています。これは神の言葉の力です。後のことを考えますと、この言葉に背くことが破滅的な結果を招くことになるようです。

三日目に陸に草、種を持つ草、種のある実のなる果樹を生え **תַּדְשֵׁא (tadshe)** タドシェー **bring forth** させよと言うと生えます。

四日目に光に言います、一日、四季、一年の区別を付け、大きいものと小さいものとなる (**יָעַשׂ**) ように。大きい光 (太陽) に昼、小さな光 (月や星) に夜を司どる **מְשִׁלֵּת (memshelet)** メムシェレト **govern** ように言いますと、そうになりました **וַיַּעַשׂ (vayáas, אָשָׁא asá to cause to be の過去形)**。この機能を大空に与えしめた **יָתֵן (yitén let ~ be given)**。近代人は太陽の半径が地球の百倍以上、質量が 33 万倍以上の大きさがああり、太陽表面から発する光が約 8 分後に地球に到達するという風に教わっています。古代人にとっては、太陽は目に見える大きさの光でした。輝度の高い光であったり、真っ赤、時として欠けて黒色に変化する光で、何かがそれを乗せて空を廻っているとみていたようです。

五日目に、水に生き物を群がらせるように言い、鳥 (何処から生じたのか不明ですが) に地の上大空を飛び回るように言いました。海の大きな獣、這い回る生き物をことごとく分離させて水に群がらせ、鳥の翼をことごとく種類に応じたものに分けさせた。そして、それらを祝福し、水の中、空に産んで増えるようにと言います。

六日目に、地に生き物を種類 (家畜、這う者、獣) に応じて、出すように言うとそのようになります。神はそれらを成し遂げ、善しとなし、神はその男 (人) (**אָדָם, adam**、アダム) を神の形に似せ男性 (**זָכָר zaker** ザクハール) とし女性 (**נִקְבָּה neqeba** ネケヴァー) につくり祝福をし、子を作り、多く、地に満ちるように言います。**Adam, zaker, neqeba** については、ここではどこから現われたかが不明です。**Adam** は **Acre Man, Red Man, Blood Man, Life Man** とされ **corporeal part of a living creature** ともあり、地、赤、血、生のイメージで生物の肉体側面を表すもので、精神、魂、霊的でないものとあります。

また、彼等が他の生物を従え、それを食せばよいとし、魂 (**נֶפֶשׁ nepesh** ネフェシュ **soul**) ある動物、鳥には植物を食せしめます。夕暮れとなり朝を迎えます。**Nepesh** には、息、呼吸の意味もあり、和訳では命ともされ、英訳では **about 170 times with "life," "lives" or "alive," 105 times with "soul," and the remaining eleven dozen occurrences with variations of "self" or certain personal behaviors** (生、命、生存、あるいは魂、自身、人の行為にも用いられる) とする解説もあります。

古くは、呼吸をしない、脈が無い、大量の出血は死を意味したでしょうし、これの逆が生、命、生きて行為をすることなのでしょう。**אָדָם, adam** を「**man 男 (人)**」と訳していますが、この場合は性別が未発で動物とは異なった行為を行う生き物なのでしょう。霊はあらゆる生き物にもある、幸を為すものもあれば、災厄を為すものもあり、死霊もあるとみられていたようであり、人間の有する、精神、魂、霊は神には劣るも他の生物とは一等優れたものとしているでしょう。

七日目には神はその業を完成させたのでお休み יִשְׁבֹּת (yishevt イイシュボト stop working)) になられたという。

さて、最初に שָׁמַיִם shamahyim と אֶרֶץ erets とが混在しているという思考はシュメールやエジプトにおける「原初の水」、深淵とされるものに似ています。また、神の言葉により万物が引き出されゆくというアイデアはメンフィスの「心と舌」の象徴の Ptah を想記せしめます。

創世記にあつては、まずは、神 אֱלֹהִים ありきが前提です。その神の姿に人をつくったとありますから、人の姿をした神を想定しています。目なくして見、耳なくして聴き、口無くして語るというイスラムの考え方からすれば、神に形を想定していなかった可能性もあります。いずれにしても、神がどこからどのようにして出現したかは説明されませんでした。

シュメールでは𒀭は「原初の水」が𒌦と𒀭に分かれたれ、𒌦から天の神々、𒀭から地の神々、人を含む地上の万物が現れます。エジプトでは「原初の水」から Atum が自生し、神々を生みますが、「心と舌」の働きによるとみます。

創世記では、淵 תְּהוֹם t'hóm のおもてに、闇 חֹשֶׁךְ khoshekh があり、神の霊 (רוּחַ rewh) が水 (מַיִם mahyim) を覆っているというイメージをとりこみましたが、バビロニアやエジプト等々の諸都市に現れた多くの神々ではなく、彼等の神 YHWH の霊とし、YHWH の絶対性を確立したように思われます。

参考文献

創世記 1 章をヘブライ語原典から逐語訳してみました LongLife MuraKami

<https://wordbyword.holy.jp/li-genesis01.html>

創世記 末日聖徒イエス・キリスト教会 <https://www.churchofjesuschrist.org/study/scriptures/ot/gen/1?lang=jpn>

Genesis Chapter 1 בְּרֵאשִׁית Mechon Mamre <https://mechon-mamre.org/p/pt/pt0101.htm>

Abarim Publications' online Biblical Hebrew Dictionary <https://www.abarim-publications.com/Dictionary/index.html>

The Firmament: What Did God Create on Day 2? EMMANUEL BAPTIST CHURCH

<https://ebcky.com/2020/08/19/the-firmament-what-did-god-create-on-day-2>

モーゼの十戒 新生宣教団 <https://www.newlifeministries.jp/the-ten-commandments>

EMMANUEL BAPTIST CHURCH の図

[The Firmament: What Did God Create on Day 2? - Emmanuel Baptist Church](#)

Enuma Elish References to Depiction of the Cosmos [Enuma Elish References to Depiction of the Cosmos](#)

おわりに

創世記の神がなされたことは、「原初の水」を変化させ、これを分けて空と陸を現出させ、万物を呼び出したごときで、(何もないところから) 天と地、万物を創造したものでない。このことはメソポタミアやエジプトの伝承を背景に成立していることを示すことができましたと思います。

また、創世記の神は、由来が記されておらず、アプリアリに存在しており、人の姿をしている（イスラム教では無形）という不思議なものにみえました。

2025.10.07

(追)

人間社会は都市、都市国家を形成するにつけ、分業が進み、それに適合する個人の能力、それを機能的に運用する人間の集団力を高めることができました。人の姿をした祖先神の出現であったと思われます。

異なる祖先神を持つ都市国家が征服者の国家に統合されますと、その祖先神に普遍的性格を持たせねばなりません。創世記の神はそういう時代の神のようです。これに失敗しますと、その国家では神が役割を果たせなくなります。

統一帝国となりますと、人類普遍の原理を有する神でなければ、成立しません。

そのような統一帝国に組み込まれたとしても、己の神、YHWH 以外を認めないのがユダヤの律法のようなです。ユダの語源は、ユダが生れる時に、ヤハウェ YHWH をほめたたえることば「イエフダ (Yehûdâh)」を発したことにあり、短縮するとユダ **Juda** となるとあります。ユダヤとは YHWH 神を祭祀する族の意味です。イスラエルはユダの父のヤコブが一晩中神と組打ちし、その神がヤコブに告げた言葉に由来しています。“קְדִינֵת יִשְׂרָאֵל Yisrā'el 「イシャラー（勝つ者）エル（神）、イスラエル」”と名乗れと云った、とのこと

です。YHWH を父とするイエスが人類普遍の原理を志すことをユダヤの律法家は拒否しました。YHWH と異なる神を崇敬する者、YHWH を知らない者、YHWH に背く者すら「隣人として愛す」ことは「YHWH との契約に反する」とするのでしょう。

民数記 20 章によれば、神が「岩」を割って水をだし民に与えたことを、モーゼとアロンが神によることを正しく民に伝えなかったため、アロンは死に、モーゼは約束の地、カナンに入ることが出来なかったとあります。申命記 32 章によれば、モーゼは、自分を造った神を捨て、「救の岩」を侮り、ほかの神々に仕える民はアロンのごとくなることを述べ、カナンに入る心得を民に訓戒したとあります。

ハマスの攻撃に自衛することは現代人にとっては当然のことです。しかし、ユダヤ人のすべてが自動的に約束の地カナンに入ることが出来るものではなかったはずで、また、パレスチナの民をハマスと同じくみて、滅ぼすとなれば、それを行うことができるのは神であり、それを越権するなら YHWH に背くことになりませんか。

十戒によれば、ユダヤ人が、人を殺すこと、隣人の家や財産を食うことを禁じています。それを犯した者がカナンに入ることを YHWH がお許しになるのでしょうか？